

土の現象も眞如の表明なれば鬼の境遇に於ける地獄の現象も眞如の表現なりとす語を換て之をいはゞ眞如の體も相も用も共に善惡に通ずる者とす完全物の眞如豈奚を器の一方に僻する者ならんや天台宗に性惡不斷と論ずるが如き是なり又其緣起的の説明には眞如を以て純善純淨なるものと定む眞如の體は純善純淨なるものゆゑ佛の境遇に於る如き善の現象は眞如の本性に順して眞如の實德を顯はすと云ものなり又鬼の境遇に於る如き惡の現象は眞如の本性に乖き眞如の實德を隱すと云ものなり其順じ顯はす方を順緣起と名け之を悟の還滅門となし其乖き隱す方を逆緣起と名け之を迷の流轉門となし其迷の方なる流轉門を去て悟の方なる還滅門に就き以て眞如の實性實德を開顯せよと獎勵するか佛教の緣起的説明なるものなり要するに眞如は其體を論ずるも善なり其相を論ずるも善なり其用を論ずるも善なりと定めて惡因果の現象は眞如の實體實相を隱すが故に此は眞如に違して眞如に順せざる妄用なり正用にはあらずとするか迷悟を辨明する緣起的教理なるものなり然り而して起信論は緣起的の論にして刻實的の論にあらず故に體相用を説く文面は姑く善の方を説て惡の方を説ざるなり義記に大位在果といへるも此意に出でず

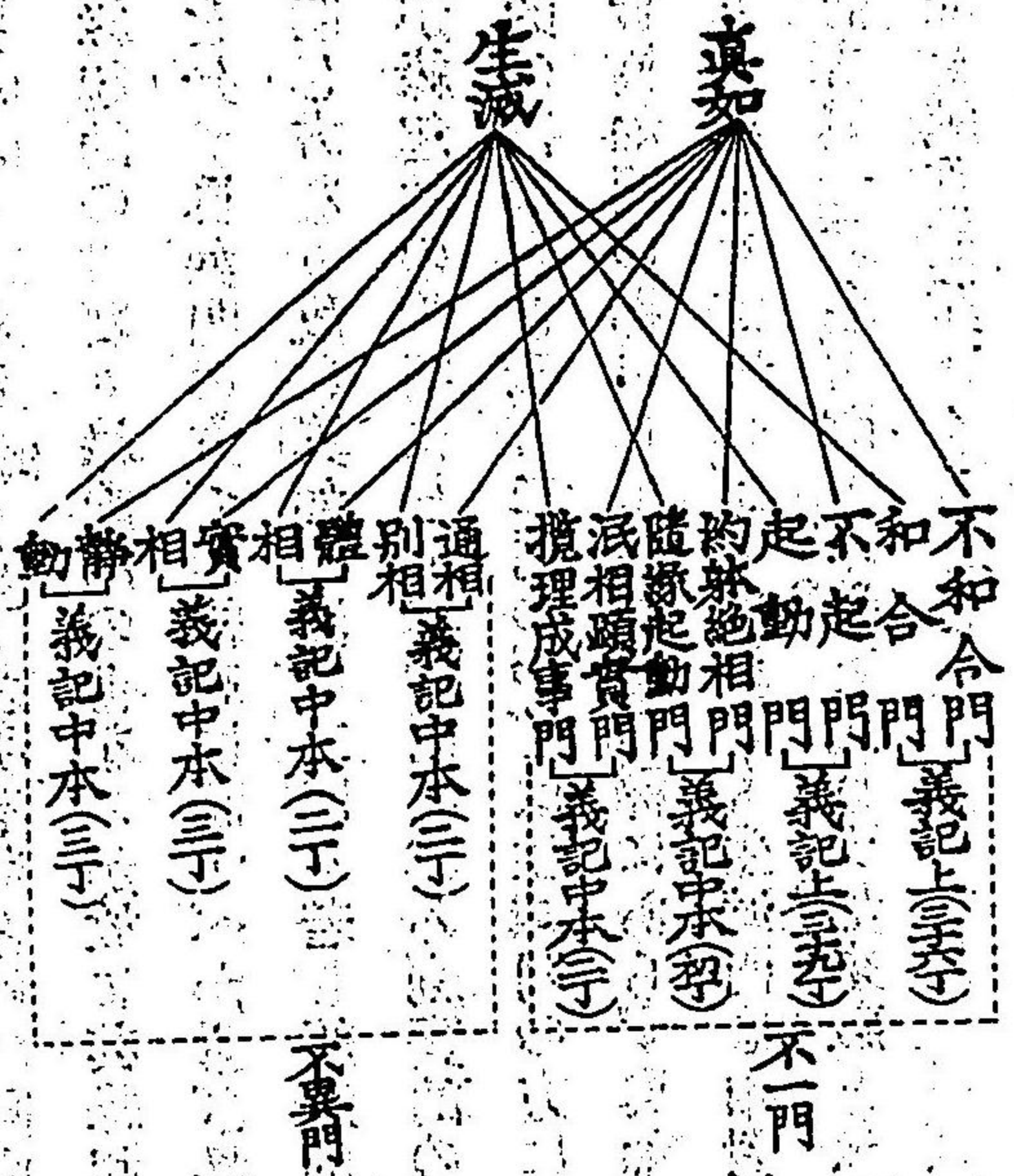
問て云く前答の如く起信論は緣起的の論にして其緣起的の論は皆眞如を純善純淨と定むといはゞ義記上四十染淨之所不虧といひ同中本初非染非淨と云は如何答て云起信論は緣起的の書なり緣起的の書なるが故に其緣起の趣を説明せんが爲に眞如と生滅の二門を分て眞如門の方では緣起は論ずべからざれども生滅門の方に就て緣起を論ずと云ふ明し方なり故に眞如生滅の二門を若し緣起的と刻實的の二大部門に配屬すれば生滅門が緣起的の説明にして眞如門は寧ろ刻實的の方に屬するものなり然れば起信論は緣起的の書なりと云も二門の中では生滅門の方にありと思へ然り而して問者の擧たる文は皆眞如門の釋にして生滅門の釋にあらず眞如門は絶對的にして又刻實的なるが故に善とも惡とも定むべからざれども生滅門は相對的にして且つ緣起的なるが故に論文も義記も眞如其名を改て本覺と説き又如來藏と云應に知るべし生滅緣起を論ずるときは眞如を純善純淨とするとす

## 第二章解釋分の取意

### 第一節 眞如門生滅門の二大部

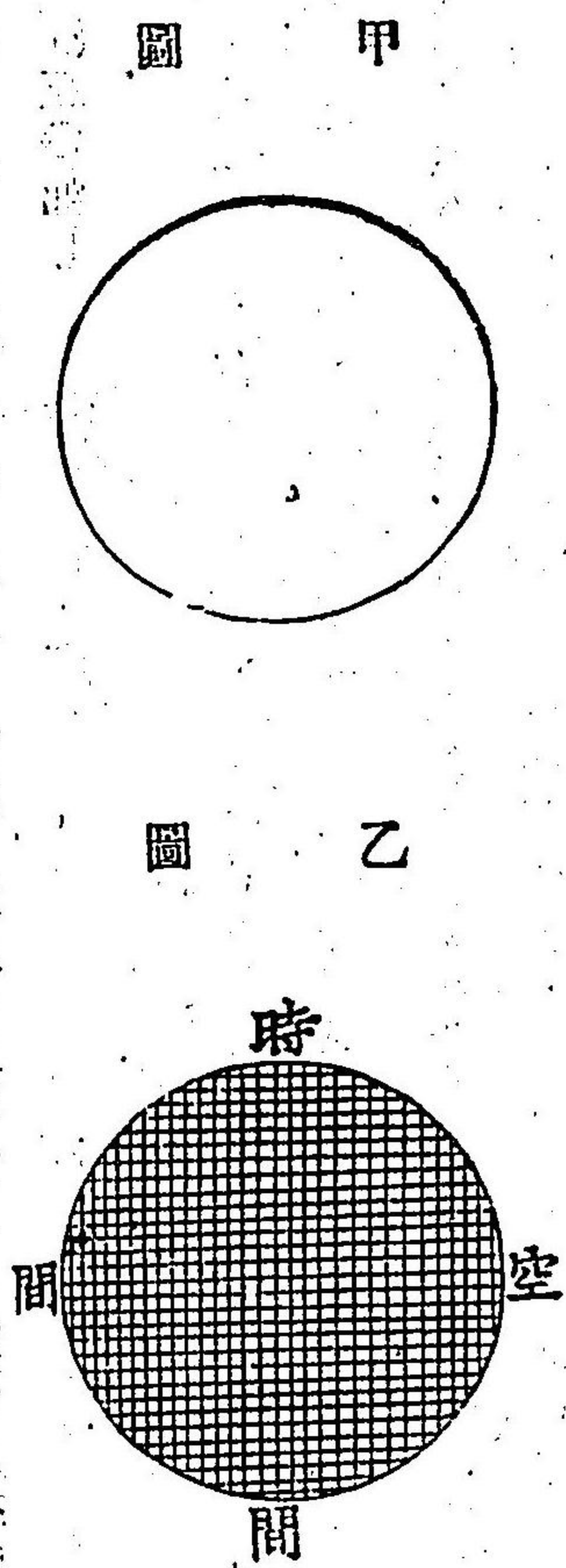
解釋分と云は余上に云ごとく前章立義分を廣げて解釋する所なり而して立義分を廣釋するにつき先づ第一着に大乘の體たる衆生心をば眞如と生滅の二大部門に分てり是に於て余も亦眞如と生滅の二大部門を辨明せんとす

それ真如といひ生滅と云は天地萬有何に就て論ずるも此二大部門あるものなり何となれば真如は本體に名け生滅は現象に名けたるものなるが故なり最多無數の萬有何者か其本體なからん又何者か其現象なからん萬有は凡て一個中に本體と現象の兩部門存するものなり准して知れ萬有凡て真如と生滅の二大部門存して缺けずと云とを然るに起



信論は前にも云如く主觀的に教理を組織して手近く吾人の心を以て大乘の法體と定めたるものゆゑ今は衆生心其者に就て真如生滅の二門を分てる者也。此真如と生滅との辨別及關係は如何と云に義記には其宜きに隨て種々の名目を施し以て二門の辨別并に關係を説示す請ふ其を圖表して中に適宜者に供せん斯の如く義記の讀者の參の命題を設て真如と生滅の辨別并に二者の關係を設けり然るに

今之を一陳述する如きは事冗長に亘るの恐れあるゆゑ余は其大意を陳べんと欲す抑も義記に出たる種々の命題之を要するに真如と生滅との二者の辨別并に二者の關係を知らしめたる者なり前表に不二門とせる四對の命題は要するに二者を辨別するにあり又前表に不異門とせるは要するに二者の關係を明すにあり其二者を辨別する不二門と云は真如生滅を分て論ずるもの是なり其二者の關係を明す不異門と云は既に分れたる真如と生滅を以て同躰無別とするもの是なり請ふ先づ不二門より説ん夫れ真如は實躰に名く生滅は現象に名けたり而して萬有は其實躰の點を論ずれば平等、無象、不生滅、不變易、と云如き義理を具へたるものなり又萬有は其現象の點を論ずれば差別、有象、起滅、變易と云如き義理を具へたるものなり試みに此が圖を設て見れば左の如し



讀者此甲圖に就て萬有は其實躰の點に論到すれば生滅時差別空の諸象を泯亡したるものなりと云ふとを知るべし凡そ生滅といひ差別と云ふは吾人の感覺圍中に現する象に限るものなり象豈奚を躰と云ふとを得ん是を以て義記に約躰絕相門といひ又た泯相顯實門と云ふ故に余之を圖表すれば白とするより外なきものとす又讀者此乙圖に就て思へ萬有は其現象の點を見れば時間的に生滅止む間なし時間的に生滅止まざるものは亦空間的に差別限りなきものなり是を以て義記に隨緣起動門といひ又た攪理成事門といへり故に余は乙圖に堅線横線を用ひて時間的の象と空間的の象とを形容せり萬有既に然らば之を心に就て論ずるも亦爾り既に躰と象を分ち論ずるに斯の如き區別あるが

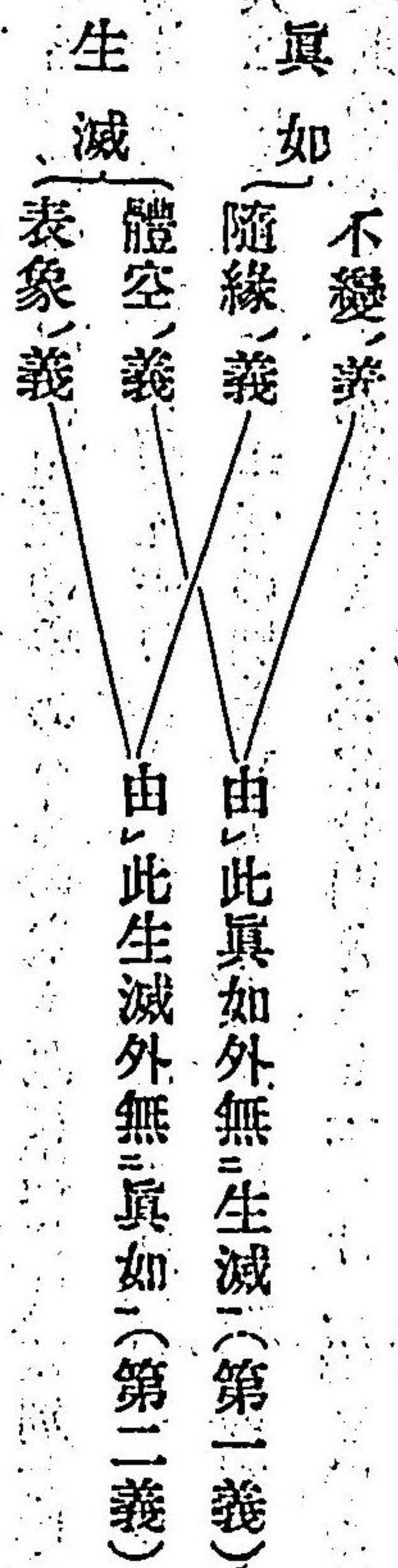
故に之を一といはんとするも一と云ふとを得ず故に眞如と生滅の二大部門を分てるものなりと云か眞如生滅の不一門なり權大乘は只此不一門のみを説て次の不異門を説かざるなり此不一門に就き更に論點を進むれば其躰は象の外に存在するもの乎又其象は躰の外に存在するもの乎と云疑問起らざるを得ず故に其疑問に答へて躰の外に象なく象の外に躰なし躰象は元來無別也と論ずるが眞如と生滅の關係を論ずる不異門なり謂く前の如く躰と象と辨別すればとて元と躰の外に象あるにあらず又象の外に體あるにあらず其體の外に象なしと云ふとを得ると同時に象の外に體なしと云とを得る所以は躰は即ち象の眞實本躰なるが故に吾人は此象に由て彼躰の存在を知るべく又象は體の表現浮影なるが故に吾人は彼體に由て此象を見るべければ也之を喩るに鏡に由て影を見又其影に由て鏡を知るべきが如し故に論文に是二門不離故と云り義記には之を喩へて體は微塵の如く象は瓦器の如しといへり斯の如く體象の關係を論じて眞如即ち生滅なり生滅即ち眞如なりと一度分れたるものを又合して一つになるが眞如生滅の不異門なり問て云く不一と不異は反對の語なるが故に若し不一と云ふが眞なれば不異にあらざるべし若し不異と云が正ならば不一にあらざるべし如何ぞ不一となる眞如生滅を復た不異とする乎

答て云く不二と云は義理を辨別するにあり不異と云は體の無別を示すにあり義理を辨別する不二門のときは真如と生滅を相對して論じ又體の無別を論ずる不異門のときは真如と生滅を相對せず真如を擧れば生滅自から此が中に收り生滅を擧れば真如自から此が中に收まると絶對的に論ずるものなり請ふ義記に就て之を辨せん  
 夫れ真如とは何ぞや不變の義是なり生滅とは何ぞや起滅の義是なり然らば不變は起滅に對するが故に不變なり起滅は不變に對するが故に起滅なりと二義劃然として相對的に區域をなす其表左の如し



義理を論ぜば斯く對立するが如しと雖も其體を論ぜば別に對立すべきものあるにあらず其生滅とは何者の生滅かと尋ねれば則ち真如其者の隨縁起動する象なるが故に生滅外に真如あるとなし又真如とは何者の真如かと尋ねるに即ち生滅其者が一方より見れば起滅すと雖も一方より考れば不變平等なる眞實本體なるが故に真如外に生滅あるとなし斯の如く生滅の方より論ずれば生滅外に真如なく真如の方より論ずれば真如外に生滅なしと云とを得る所以は元と真如にも生滅にも兩義を有するが故なり其兩義併存

の表は左の如し



論文に之を配當すれば解釋分の中に心真如門との心生滅門との兩段あり其心如門と云一段は真如生滅に各二義ある中の第一義に依て説たるものなり其心生滅門と云一段は真如生滅に各二義ある中の第二義に依て説たるものなり真如に就て論せば真如外に生滅なきが故に不異なり又生滅に就て論せば生滅は真如の隨縁表象にして生滅外に真如なきが故に不異なりと義理の辨明に分れたる相對的二門<sub>不</sub>を除けば體の論斷に來ては不異無別なりとするにあり

第二節 真如門第一(離言真如)

真如を説明するに就き論文大に兩段と分れたり其第一段の説明を離言真如と名け其第二段の説明を依言真如と名く離言真如とは真如は既に萬有の實體なるが故に凡の言語以て能く説示すべからざるものとするにあり依言真如とは真如は不可説に相違なけれ

ども之を不可説として説かざれば吾人これを證悟すべき方便なきが故に證悟の方便階梯に供せんが爲め假りに言論を設け其假なる言に依て離言の眞如を詮顯するにあり請ふ先づ離言眞如より説かん

凡ての言語は吾人識中の觀念を表象するものなり而して凡そ意識の觀念は皆心面の虚影を認るものにして實體の點を知るものにあらず既に虚影を知て未だ本體を見るとき能はざる識中の表象(即言語)豈奚んそ本體眞如を説明するを得ん夫眞如とは凡ての偽を簡ひ妄を消す辭なり故に甲と説くも乙と説くも丙と語るも丁と論ずるも皆眞に似て眞に非る偽妄なれば之を戲論と名け眞如となすとを得ず故に論文に一切法從<sub>レ</sub>本已來離<sub>二</sub>言説<sub>一</sub>相<sub>二</sub>離<sub>二</sub>名字<sub>一</sub>相<sub>二</sub>離<sub>二</sub>心緣<sub>一</sub>相<sub>二</sub>といへり離言の所以

又識中の觀念は必ず主客能所の別を立て甲乙彼此の異を見るものなり而して凡そ横に差別の象あるものは必ず堅に生滅の象あるものなり既に横には差別し堅には變壞の狀あるもの豈奚んぞ如と云とを得ん夫れ如とは相似の義即ち無差別平等を意味する辭なり然るに吾人は甲と思ふにも主客の別を立て乙と考ふるにも彼此の意を見る既に主客の別を立て彼此の異を見るが故に之を妄想分別とこそ云へけれ絶對的の眞如とは名くべからざるなり故に論文には畢竟平等無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>變異<sub>一</sub>といへり經處の所以

それ眞如とは眞理の極點に名く而して吾人は甚だ不完全なる有限の思想を有する者なり(假令人類中に識者と許す者も)故に眞如の實體は知るべからず然り眞如は既に不可知的なるが故に何とも蚊とも名狀すべからず眞如は既に不可知的なるが故に其と同時に又不可説的なり故に之を眞如といふも固より其當を得たる名稱にはあらざるなり之を絶對と説くも固より其當を得たる解釋にはあらざるなり然りと雖も之を絶對と説て諸種相對的の妄執を拂ふと共に亦之を眞如と名て諸種の名詞を除んとす故に絶對の説を聞て相對的の妄執を除き眞如の名を聽て諸種の名稱その當を得ざるを悟りたれば其と同時に絶對と云ふ想像も眞如と云ふ名も共に除かざるべからず若し相對的の想を廢るも尙絶對的の考を遺し諸種の名稱を亡すも尙眞如の目を存するときは未だ妄想の範圍を脱却したる者にならず未だ眞如の實際を悟り得たる者にあらざるばなり故に論文に言眞如者亦無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>相謂言説之極因<sub>一</sub>言遺<sub>二</sub>言<sub>一</sub>といへり(讀者は此因言遺言の四字深く味ふべし)之を喩るに劇場に柝聲を假るは衆聲を止んか爲なり衆聲既に止めば柝聲も亦止めざるべからざるが如し之を名て離言眞如と云ふ

斯く論ずれば人或は謂はん眞如は空無なるものなりと又或は謂はん眞如は萬有已外に立する者なりと辯して曰く眞如豈それ然らんや若し空といはゞ空は有に對するの辭な

るゆえ空の一方に偏すと云へし既に一方に偏する僻見を何ぞ真理となすべけん故に論文依言眞如の下に如實空と如實不空の兩義を出せり又眞如を萬有已外に立するものとせば即ち万有の實躰とするを得ず然るに眞如は萬有の實躰なり眞如は既に萬有の實躰なるが故に萬有以外に存在するものにあらず全宇宙の萬有其儘が絶對的眞如なり

## 第三節 眞如門第二(依言眞如)

離言眞言、依言眞如といへば眞如に二個ありて對立するか如く聞ゆれども眞如に二個ありと云にはあらざる也眞如は絶對的なるが故に實は一とも云ふべからざるものなり況や二個ありて對立すと云とをや眞如は究竟の真理なり究竟の真理はどこまでも離言絶慮なり妄想界の吾々にありては不可說的なりといはざるべからず然るに之を不可說なりとして説かざれば吾人自身に眞如の寶玉を具へたりと云とを信ずる信心を起すと能はず吾人この信を起さざれば修行の途に就くべき時節なし修行の道に就かざれば迷苦を去りて眞樂の境遇に到るべき時節あるとなし是を以て離言の眞如に姑く假言を設けて眞如のいと尊きことを知らしめるが依言眞如なるもの也  
余茲に離言眞如と依言眞如とを辨別するに(一)離言は眞如を絶對的に論じて完全無缺なるものとす故に論文に心眞如者一法界大總相法門體といへり又依言は眞如を相對的に

論ず故に論文に依言説二分別有二種義といへり(二)離言は既に絶對的の論なるが故に眞妄不異として眞の外に妄を見ず吾人の境遇に現象する妄心安境を押へて即是れ眞なりとす故に論文に以一切法悉眞一故といひ或は以一切法皆同如二故といへり又依言は既に相對的の論なるが故に眞妄不一として眞の外に姑く妄を置き其妄に對して眞の眞たる趣を示す故に論文に従本已來一切染法不相應一故といへり(三)離言は既に絶對的に眞妄不異とするが故に眞如を以て染とも淨とも定めざれども依言は既に相對的に眞妄不一とせるが故に眞如を以て純善純淨なるものとす故に論文如實空の下には眞如の體中に凡ての妄染なしと説き如實不空の下には淨法滿足といへり之を離言眞如と依言眞如の辨別とす要するに眞如は究竟の真理なるが故に之を離言絶慮と定め而して更に之を悟らしめる爲の方便階梯に説くが依言眞如なるものなり

論文を見るに依言眞如に就き如實空と如實不空の二種を分てり其如實空と云ば消極的に眞如を説明し其如實不空と云ば消極的に眞如を解釋するにあり消極的に眞如を説明するときは眞如を空と云へし何となれば眞如は既に究竟の真理に名く究竟の真理には一點の妄染もあることなきが故なり例へば光明といへば即ち闇黒は空無なるが如し若し闇あれば明にあらざるが如く若し妄あれば即ち眞如にはあらざるなり故に眞如を呼

て如實空と云へり。如實は眞如の異名なり更之を積極的に釋解するときは眞如を不空と云べし何となれば眞如には凡ての妄染なきが故に妄を打消すためには空と云へども眞如其者なしと眞如の本體までを打消すにはあらざるが故なり例へば闇なしと云へばとて明なしと云にはあらず闇無なりと云と云に早や明の存在を示し居るが如し故に眞如を呼て如實空と説く同時に復た眞如不空と説て眞如の存在を示し此眞如には只妄染なきのみならず諸種の妄染に反對する無量の功德完全せりと云とを明せり嗚呼此の如きいと尊き眞如は誰人か具へたる乎曰く他に求むべからず貪愛瞋憎の想の止む間なき吾人の妄心中に本來朗然として安坐するとなり嗚呼貴重なる哉吾人の一心之を修せざるべからず之を磨かざるべからず之を修し之を磨けば眞如の明德茲に顯はれ凡夫轉して佛陀となる豈樂しからずや豈樂しかずや

問て曰く佛教中緣起的の説明には眞如を以て純善純淨とすれども刻實的の説明には眞如を以て非善非淨となす而して之を起信論に就て云と眞如門は刻實論に當り生滅門は緣起的に當ると云と已に前講に見へたり三十二頁より三十四頁まで然るに今や眞如門中依言眞如の方は眞如を純善純淨と定めたりと云は前後撞着の辨にはあらざる乎

答て云く前に云ことく眞如の實理を示すは離言の方にありて依言の方にあらず故に若

し眞如生滅と二門對立したところでは眞如門の全部を實體的即ち刻實論と云べきなれども其眞如門中に離言と依言と分れたところでは離言の方が純粹實體論に當り依言の方は緣起的に關係して眞如の本體を論ずるゆる此は純然たる實體論とは云ひ難きなり法藏の別記(十六)に恒沙の性徳皆是生滅門内の眞如中の假非二是自性不變中の辨一云々教理鈔六(四十六頁)是即寄生滅門一所假說一也云々既に離言の方は純粹實體論なるか眞如を絕對的に完全無缺なるものとして之を善とも惡とも又淨とも染とも定めざるなり又依言の方は緣起的即ち生滅門に關係して眞如を論ずるが故に眞如を以て相對的に純善非惡純淨無垢なるものと定めたり

問て云く同じ眞如を或は非善非惡非染非淨とし或は純善純淨とする所以は如何答て云く眞如に二個あるにあらざれども之を絕對的に論ずると之を相對的に論ずるとの區別なり離言は既に眞如を絕對的に論ず既に絕對的に論なれば之を善惡とも淨穢とも云べき等なし何となれば善惡染穢は相對的の名なるが故なり又依言は既に眞如を相對的に論ず既に相對的の論なれば之を純善純淨と爲さざるべからず之を純善純淨とせざれば一に眞如は貴き者と之を尊信する信心を起すと能はず二に或る現象は眞如の理に違するが故に迷なり或る現象は眞如の理に順するが故に悟なりと云様に迷悟染淨善惡等を分界する標準立たざるなり之を純善純淨と定るところて之を尊崇する心も起り又之に

順せざる者は凡て悪なり悪にあらざれば妄染なり妄染にあらざれば迷夢なりと云ことを得ると共に之に順するものは凡て善なり善にあらざれば淨なり淨にあらざれば悟なりと云とを得る是を以て縁起的生滅門に關係する依言眞如は純善純淨と定めたるもの也

第四節 生滅門第一(阿黎耶識の語義)

大乘の法体たる衆生心に就き已に其實体即ち眞如門といはるゝ點は略述し終りたれば是より進んで心の現象即ち生滅門といはるゝ點を講述すべき場合となれり而して其生滅門を講述するに就き先づ阿黎耶識の語義を定めておかねばならぬ此阿黎耶識と云は萬象萬化の要素にして而も萬象萬化を概括するものなり故に阿黎耶識と云ものを極めておかねば生滅門の大本が解らぬゆえ余は先づ阿黎耶識の語義より陳べんとす

阿黎耶とは印度の梵語なり唐朝の玄奘は阿黎耶の語を傳ふ直譯して無没といひ義翻して藏と云ふ即ち萬有を含藏して没失すると無しと云意義なり蓋し如何なる譯ありて此識は最多無限の萬有を凡て含藏して没失せざる者とする乎と云に阿黎耶識とは眞如の一變して更に千態萬狀の諸現象を生ぜんとする位に名けた者なるが故なり語を換て云と眞如より萬象を開發する初歩初點初級これ阿黎耶識なるが故なり更に換言すると阿黎耶とは萬象萬化の一大要素なり而て萬象は此阿黎耶の外に出来るもの乎と云に然らず眞如其者の一轉

したるところ是れ阿黎耶なり此阿黎耶が更に三轉三轉四轉五轉と段々に細より麤に移り來るところ是れ吾人の見る諸現象なり故に水の外に波なきが如く眞如の外に萬象なきと共に又阿黎耶の外に萬象なし既に阿黎耶の外に萬象なく此阿黎耶の更に數轉幾變したるところ即ち萬象なるが故に阿黎耶は萬象を發生するの必要なりといはるゝと共に又萬象を含藏し没失せざるもの也と云とを得る之に由て論文に能攝一切法能攝一切法の義の言を解釋するに包含の義と出生の義との兩義ありと云は佛書の通例なり今も此通規を出でず請ふ之を思へ蓋し何に由て此阿黎耶は萬象開發の要素なると共に又萬象を含藏して餘さざるものと云とを得る乎と云に此識には覺と不覺の兩義を併有するが故なりとす其覺と不覺の兩義は次段に辨明せん

第五節 生滅門第二(阿黎耶識に就て唯識論と起信論の辨明)

新譯家の長老玄奘論師は成唯識論に阿黎耶識の原語を用ひ舊譯家の長老眞諦論師は起信論に阿黎耶識の原語を用ひたり阿頼耶と阿黎耶は其語異なりと雖其義同じきなり然りと雖も彼の唯識論と此の起信論とを對照するに此識の論じ方に參差なきにあらず此識の論じ方に參差あるところ即ち彼は權大乘教なりといはれ此は實大乘教なりといは



る、所なり請ふ其參差を辨明せん  
先づ之を時間的に論ぜんか彼の唯識論の阿頼耶識は生滅不生滅の中では生滅の一部分のみを説て未だ不生滅の一部分を論ぜざるなり故に彼論の中に恒轉如暴流と云喩も出であるとなり其意は阿頼耶は有爲法にして無爲法にあらず而して有爲と無爲は劃然區別するものなり混同和合して論ずべきものにはあらず而して阿頼耶は即ち有爲法にして無爲法にあらざるがゆゑ其者の過去際より未來際まで恒存するにも係はらず恰も急流の前水後水と變換するが如く移り替りて瞬間も止住するとなさきものとするにあり然るに起信論の阿黎耶識は彼れと異なり生滅と不生滅の兩義を併有するものとす何故に之を生滅と不生滅の兩義の併有せるものとする乎曰く不生滅の眞如一變したるところ是れ阿黎耶なるが故なり喩へば水の動搖して出來たる波なれば波の全體これ水なるが如く眞如の一變したる阿黎耶なれば生滅の阿黎耶の全體これ不生滅の眞如なりといはざるべからず之を要するに眞如が動て出來たる阿黎耶なれば表面より之を論ぜば生滅心なれども裏面より之を論ぜば不生滅心なりと云が起信論の阿黎耶識なり故に論文に不生滅與生滅一和非一非異といへり是を以て唯識論の方を頼耶緣起と名けて眞如緣起といはず起信論の方を眞如緣起と名けて頼耶緣起といはざるなり蓋し起信論は

緣起の源を唯識論より一步深く論ずるが故なり  
更に今之を空間的に論述せんか彼の唯識論の阿頼耶識は相對絕對の中には相對的の一部分を説き未だ相對的の阿頼耶識に絕對的の分子あることを論ぜざるなり故に彼は各自門の唯識と云ことを論じ阿頼耶識は吾人各個々に有するものにして甲人の阿頼耶乙人の阿頼耶丙人の阿頼耶といつく迄も差別せるものとす是を以て彼れの唯心説は相對的唯心論と謂ふべきなり何となれば萬有の大元を心となし其心は即ち吾人各個差別的に相對的に固有する阿頼耶識是なりとするが故なり然るに起信論の阿黎耶識は相對中に絶待を含藏するものとす語を換へて云と表面より論ぜば相對的なれども裏面より論ぜば絶對的なりと云が起信論の阿黎耶識なり其意は阿黎耶は吾人各個差別的に現象し居れども其差別的に現象する本體即ち眞如を論ずれば無差別なり絶對なるが故なり之を喩るに波を見れば甲波乙波と差別異狀あれども其水を論ずれば差別異狀少しもあるとなさきが如しと云意なり是を以て起信論即ち實大乘教の唯心説は絶對的唯心論と謂ふべきなり何となれば萬有の大元たる心は波の如く差別すると共に又水の如く無差別平等絶對無限なるものとするが故なり  
更に之を眞妄相對に就て論ぜんか彼の唯識論の阿頼耶識は妄の一點を説て眞の一點を

論せざるなり語を換て之を云と阿頼耶識を非善非惡(無記)なるものとして善とも淨とも爲せざるなり然るに起信論の阿黎耶識は眞と妄とを併有するものとす其意は純粹善なるか又淨なるか或は純粹惡なるか又妄染なるかてあれば阿黎耶識と云べからず其本性自質の純善純淨なるにも係らず現象起動して幾多の妄染を帶たるものは阿黎耶識なりと云にあり故に論文に阿黎耶識に就て覺と不覺の二義ありといへり之を要するに一は眞如凝然不作諸法の格言を固く守りて動かず一は隨緣眞如作諸法の格言に依り阿黎耶論と云も全く眞如の隨緣起動したるものとす斯の二大異點は權大乘教と實大乘教の相分るゝ所唯識論と起信論との所説の相違する所なり

第六節 生滅門第三(阿黎耶識の二大部門)

前に云如く起信論に説ける阿黎耶識は唯識論(法相宗)に説く阿頼耶識に異なりて覺と不覺の兩義を含蓄するものとす否此兩義を合同したるものなり之に由て今其兩義を辨明せざるべからざる場合となれり

抑も覺といひ不覺と云は如何なる意味を云乎曰く覺は覺照覺察覺明の義に名く則ち環の自性潔白なるか如く鏡の性質清朗なるか如く吾々の阿黎耶識は若し先天的固有の本性を論すれば清淨皎潔として一點の妄塵もなく能く萬事萬物の眞理を照すべき大智慧

光明の徳あるに名けたる言なり又不覺と云は不は無也と註し覺は明也と解して恰も璞の塵を被り鏡の垢を帯るかため物を照すの明なきか如く萬事萬物の眞理を見るの明なきに名けたる言なり語を換て之をいはゞ覺とは前の眞如是なり不覺とは無明是なりと云べし此眞如無明を合併したるところ之を阿黎耶識と名く此外に阿黎耶識なるものありとなし

問て云く前には眞如と云今何ぞ其名を改めて覺と云乎答て云く夫れ覺とは不覺に對する相對的の語なり而して前の眞如門は絶對的の本體論なり既に絶對的本體論なるか故に覺と云如き相對的の名詞は用ゆべからず又此の生滅門は相對的の現象論なり既に相對的の現象論なるか故に躰象眞妄差別を論するを主とす故に眞如と云如き絶對的の名稱を廢して相對的の語を假り不覺の無明に對して眞如の名を覺と改めたるものなり要するに吾々凡夫人は不覺の妄想心最も甚しき無明者なれども此か先天的の本性を論すれば萬事萬理に通曉すべき眞如の明德を固有せりと云に歸す

然り而して吾人の阿黎耶識に此の如き覺不覺の兩義ありと云とを如何ぞ知り得べき乎と云に凡そ吾人に不覺の無明ありと云とは辨を俟たずして知べし何となれば吾人の心は頗る不完全なるものにして眞理を照見すると能はざるか故なり而して其不覺無明は

何に由て發生する乎といふに則ち本覺あるに依て發生せる者なり例は鑄は何に依て出來る乎といへば則ち金屬あるに依て出來たりといはんが如し金屬なければ鑄を發するとはなければとも金屬あるに依て鑄を生ずるとあり若し本覺の眞如なければ不覺の無明起るべきなければとも本覺の眞如あるに依りて不覺の無明起る是を以て論文に依る本覺故而有不覺といへり然らば不覺の無明に由り却て本覺の眞如あるとを知るべきなり且つ夫れ吾人の心は不完全なりと雖も修練に由ては聖人とも成り賢人とも成り進んで佛にも成るべき進化を見るとあり抑も修練に由て斯の如く靈美なる光を發するは本來心自家に其光を呈すべき徳を先天的に固有せるがゆへなり例せば瓦石の如き之を琢くも其光を見ざるは元來其徳を固有せざるに由る又玉璞の如き之を磨けば其光を呈するは彼れ元來其徳を固有するに由る此に由て之を觀るに吾人に若し本覺なかりせば如何に之を修し之を治するも美麗なる進化の現象を見るとなかるべし他語以ていはば修行累るとも聖賢と成り佛陀菩薩と成るとなかるべし然るに修行其功積めば最優美なる進化現象を呈し遂には佛陀にも成るとを得と云は凡そ人たる者は皆此本覺を固有せるが故なり否畜類と雖も之れを固有するものとす是を論文には本覺内熏といへり(彼れ宋儒の論する本然の性と云は今此覺の義に當り又氣質の性と云は今此不覺の義に當る彼

は此を應用したるものと謂べき歟)

#### 第七節 生滅門第四(本覺始覺の辨別)

前の如く阿黎耶は覺と不覺の兩義を具へたるものとす而して其覺につき又本覺と始覺を分てり此に就き如何なる點を本覺と名け又如何なる點を始覺と名くる乎と云に本覺は先天的固有の性質(體)に屬する名稱なり始覺は後天的現象の作用に屬する稱號なり例へば本覺は種子の如く始覺は莖幹枝葉華菓の如し凡そ百草萬樹の現象は各個自家の種實に由て開發するものなり而して其莖幹枝葉華菓の現象は還て自個種實の性徳如何をば徵證するに足るものなり斯の如く本覺は現象を云にあらざる善人も惡人も否動物界にまで一般普有せる内包的の性徳を云ものなり又始覺は恰も種實の開發せるが如く内包的の性徳自動して漸々に眞理を見付け徐々と善行徳爲の現象を呈するもの是なり此始覺一步進めば一段本覺の徳を顯はす二歩進めば二段本覺の徳を顯はす三步四歩五歩等之に准じて知るべし斯の如く益々進み愈々昇りて始覺その極點に達すれば方に本覺眞如の全徳を發顯するとを得る之を名けて佛陀と云ふ既に始覺益々進んで本覺眞如の全徳を發顯しぬれば本覺の外に始覺とてあるとなし始覺は元と本覺より顯はれたる作用なるが故に始覺究竟の曉は始覺己れを惹起したる本覺の源と即ち始覺自家の本體(本

覺)に還歸する之を始本不二と傳ふ即ち論文には本來平等同一覺といへり例へば氷は水より出て復た元の水に還るが如きものと思へ法藏の別記 廿三葉披け

第八節 生滅門第五(始覺の發達差別)

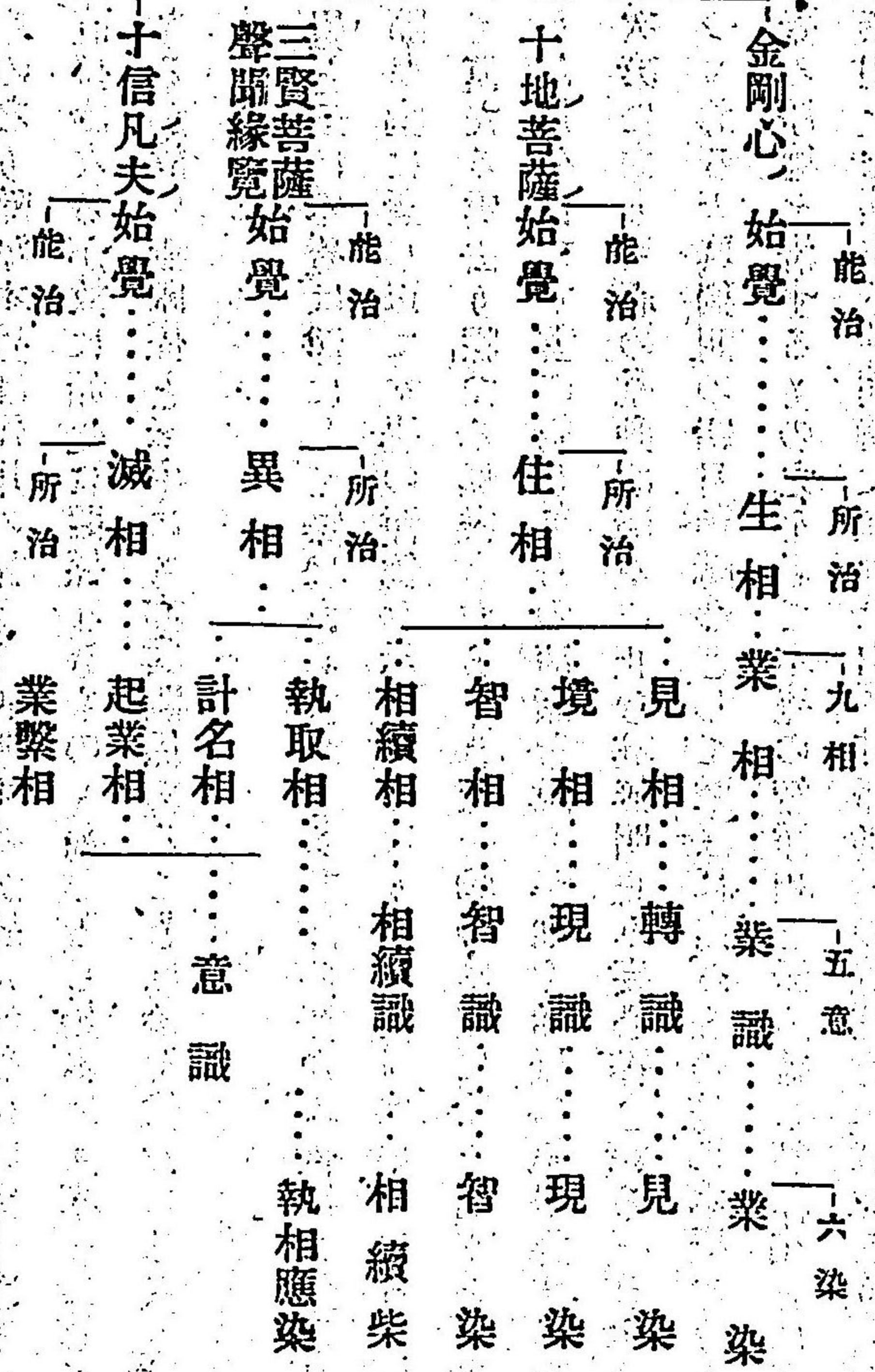
前辨の如く始覺は是れ本覺より呈する作用なり此に就き問て云く其本觀より呈する始覺の作用とは如何なる働きである乎答て曰く他にあらず不覺を對治する働き是れ始覺の作用なるものなり而して其不覺を對治すと云ふは恰も水熱するに隨て冷去り明來るに隨て闇去るが如く始覺の増進するに隨て不覺の減滅するを云ふ要するに迷亂の心象變化して眞正の心象に轉するとなり然らば冷あれば熱なく熱なれば冷なく冷と熱とは兩立するを得ざるが如く又明來れば闇去り闇來れば明去り用と闇とは同時に兩立するを得ざるが如く始覺起れば不覺去り不覺起れば始覺去りて始覺と不覺は同時に現象するとなきものなり但し始覺にも優劣の等差あり不覺にも麤細の差別あるが故に其最も優れたる始覺とは凡ての不覺か同時に現象するを得ざれども其稍々劣なる始覺とは細なる不覺は同時に現象するとなきにあらず例せば最も優れたる光明即ち太陽の光線を以て射る場處の如きは秋毫の黒闇も存するを得ざれども稍々劣れる光明即ち洋燈蠟燭等の光線なれば多少の黒闇は同時同處に併存するを得るが如し

凡そ佛教に於る斷惑の規則と云は細意味なる妄惑を對治するには優れたる智力を要すれども麤厚なる妄惑を除滅するには劣れる智力も能く之を對治するを得るものとす之を要するに能治の智力と所治の妄惑とを對治するに一方麤強なるものは一方弱劣にても退除の効を奏すれども一方細弱なるものは一方強優でなくば退除の効を見ざるものと云に歸す斯く所治と能治は強弱優劣反對せるものなりとするが佛教一般の定説なり俱會唯識 等皆然り

然らば今始覺といひ不覺と云ふ之を能所に分れば始覺は是れ能對治の智力なり不覺は是れ所對治の妄惑なり何となれば始覺の智力増進すると共に不覺の妄惑減滅するが故なり斯く一方進めば一方退くところを佛教には斷惑證理の順序となす是れ始覺の作用なるものなり之に由て始覺の作用を詳かにせんが爲め此が發達の階位優劣の等差を論ぜんとするには先づ不覺の麤細差別則ち吾人に現象する妄惑の厚薄輕重を辯別せざるべからず之を辯別せねば如何なる妄惑を除却する始覺を以て優となし如何なる不覺を伏除する始覺を以て劣となす乎と云と定め難きなり故に論文覺の義を陳へ終て後に不覺の義を詳説してあれども此始覺の發達差別を示めさんが爲め覺の義を説明する中に於て下に説く所の不覺を概括して引上げ以て或る始覺は甲の不覺を伏除し或る始覺は

この不覺を滅除すと云ふを陳へて始覺の發達差別を示してあり請ふ之を述ん  
 抑も起信論は不覺に由て起る諸種の忘惑を九相(之を分て三細六麁と云なり)と分ち或は五種の意並に  
 一の意識とに分け或は六染と分ちあり蓋し此は覺の義を終りたる後に至りて不覺の義  
 を説明するところに出たるとなり然るは始覺の發達差別を示さんが爲めに是等九相五  
 意六染をば覺の義を説明する滅に引上げ之を概括して生相住相異相滅相の四相とな  
 し以て滅相を伏する始覺は其劣なるものなり異相を滅する始覺は一段發達せるが故に  
 前より優れたり住相を滅する始覺は更に一段發達せるが故に尙一層優れたり生相を滅  
 する始覺は發達の極なるが故に此は最も優れたり故に之を究竟覺と名け始覺其極點に  
 達して方に本覺と合同したる佛陀の境遇なりとす其生相と云は不覺の元始妄惑の初點  
 是なり其住相と云は妄已に生じ惑方に起れば妄境實在の固執更に一段進むと變じて自他差別  
 するものなり相續と云其異相と云は妄境實在の固執更に一段進むと變じて自他差別  
 の見を爲し怨親の情を起し貪瞋等の諸種煩惱止ざるに至る所是なり相續と云  
 は既に貪瞋等の煩惱起れば十善十惡等の業を造り來世轉生して原因方に成就するところ  
 是なり滅相の滅は終極の境也請ふ之を圖表せん

始覺之四位



第九節 生滅門第六(本覺固有の性徳)

阿黎耶に覺と不覺の兩義を具へたる中覺の義に就き又始覺本覺の兩點を分て論辨する  
 が起信論の説き方なり而して其始覺の點は前項に略述したれば今や本覺の點を陳んと

す  
本覺を説明するの論文二段に分れたり第一隨染本覺第二性淨本覺是なり其隨染本覺と云は作用の點より本覺を説明せるものなり其性淨本覺と云は直接に本覺の體德を顯示したるものなり隨染本覺は作用の點より説明するが故に始覺に關係せざるを得ず性淨本覺は直接論なるが故に始覺に關係なきもの、如し蓋し始本は元來一にして二、二にして一なるが故に無關係と云中にも亦其關係あることは論を俟たざるなり請ふ先づ隨染本覺より説かん

隨染本覺と云は本覺は淨にして染にあらざれども其淨の淨たる性德を顯示せんが爲めに染に隨ひ染に對し以て本覺の淨德を示すものなり例せば月は如何なるもの乎と云問に答へて漠たる雲去り朦たる烟盡きぬるとき無一物の空間に冷々朗々として露顯する者是なりと月を昏ます雲に對して月の清潔を説くが如く始覺の風増進するに隨ひ無明の雲は次第に去り妄心の亂動は漸々に止む其無明止み妄心盡きぬるとき本來己心中に存在しつゝある天真獨朗の明月本赫然として顯はれ出るもの是れ本覺なりと妄染に對して本覺の淨德を辨ずるもの之を名て本覺の智淨相と云ふ蓋し智淨相とは妄染の智力を以て無明を破壊すると同時に顯はれ出る純淨無垢の覺體と云意味なり此を論文に智

淨相者謂依法力薰習一如實修行滿足方便一故破二和合識相一滅二相續心相一顯二現法身一智淨故といへり

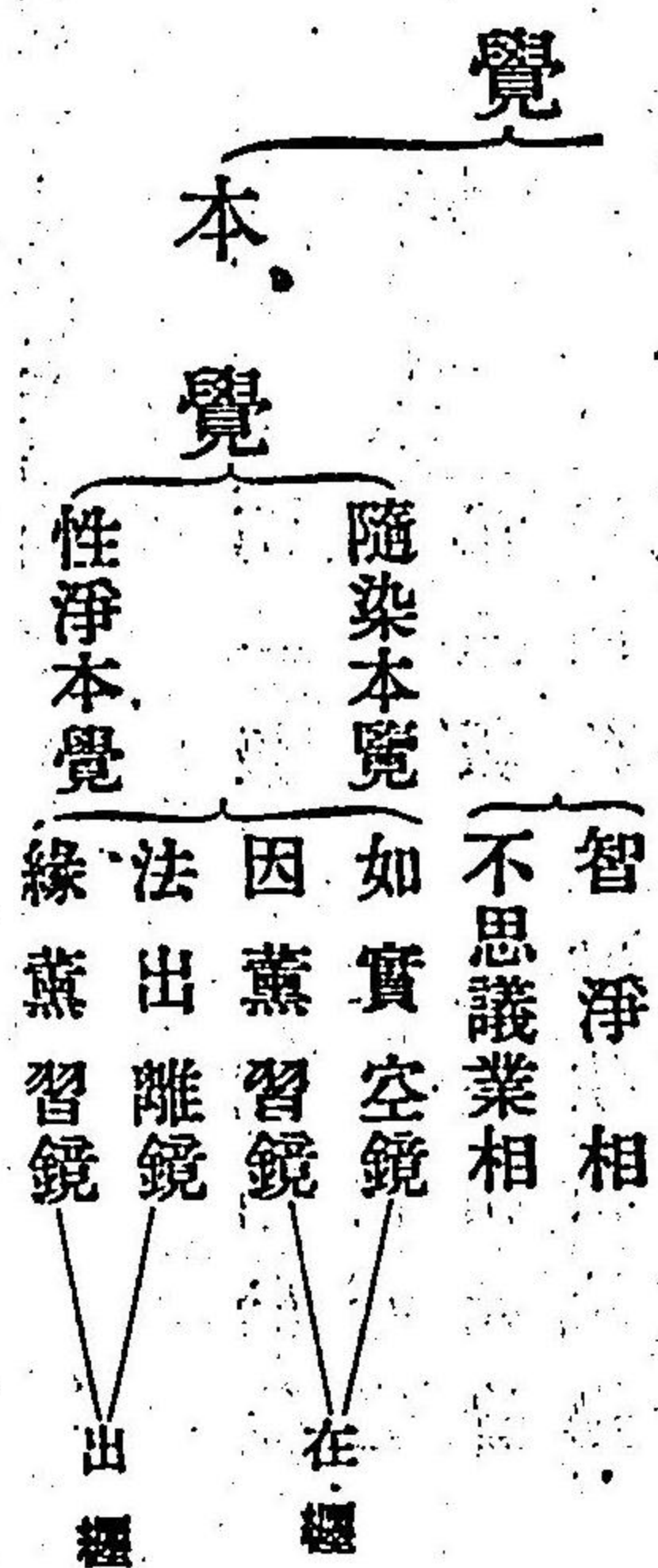
雲去れば月影玆に顯れ其光輝を恣まにして高山幽谷河海平地凡て殘る隈なく照して塵界をも餘さざる者なり只月光の至らざる處は月に向はざる場處あるのみ如此無明の雲去り本覺の月顯るゝと同時に固有の本覺は今や其德を恣まにして十方世界の衆生を遺る隈なく照見する大用を呈す大智惠光明と云は此謂なり其照見すると同時に恰も天月が萬水の中に其影を宿す如く本覺の德用は隨類應同と萬機に應同して佛の形を示現し諸の法を説示して衆生を教導し以て衆生各々分に應じて妄を去り眞に入るべき大利益を被ら令ることを得る然れども向はぬ泉み濁れる河には月影現せざるが如く過去萬世に善根薄く惡業劇しき無宿善の者は心に佛の善形を現するともなく佛の教を聞くともなく縦ひ偶々見聞するとあるも之を信仰すると能はざるなり此に反し過去萬世に善根重れる宿善の者は恰も清水の如く月影を現するが如く根機に應じて佛の相好を心内に見奉ることを得縱令ひ佛身は目撃せざるも心に佛ありと信じ佛の説を聞て疑はざるに至る聞て疑はず之を信ずるの深さ又必ず之を行するに至る之を行すれば其効空しからず必ず應分の利益あるは因果必然の理法なるものなり斯の如く無明去り本覺の體顯はるゝと同時に本覺

其者の徳用として一切衆生の根機に隨ひ臨機應變應病與藥の大用をなすもの之を名けて不思業相と云(蓋し本覺自在の業用は凡夫人の思議するところにあらずと云意味なり)此を論文に不思議業相者以依智淨相能作一切勝妙境界といへり  
 要するに智淨相と云は始覺究竟して佛陀覺者と成り得たるところに名づく又不思議業相と云は成佛すると同時に佛陀が衆生の機感に應同して形色を顯現し法を説き益を興る自在力用に名づく然らば自利と他利の區別ありと雖も共に本覺の染に隨ふ智淨相は自身に隨ふ徳なり、不思議業相は他の染に隨ふ徳なり徳用なるが故に之を隨染本覺といへり別記二十紙を見よ  
 已に隨染本覺を説き終れば當に性淨本覺を説くべし性淨本覺と云は前辨の如く始覺に關係せず直接に本覺の性質を説明するもの是なり然り而して其性淨本覺を辨明するに是なりつき論文は四義を分ち其四義を説明するに一の喩を以てせり其一喩とは何を曰く淨鏡

抑も淨明なる鏡面を見るに一塵のあるとなきが如く本覺の眸中には本來無一物と一點の妄もあるとなき也之を名て如實空鏡と云第一又塵は空無なしとも鏡眸はなきにあらず鏡眸なきにあらずるゆゑ能く影を現すが如く妄に就て論せば本來無一物なりと雖も本覺其者なきにあらず本覺なきにあらずるゆゑ能く復た能く萬象萬化の妄影を現出す之を

名て因薰習鏡と云ふ第二又鏡面たとひ穢物を影現すとも其の鏡眸は穢れるものにあらず斯の如く本覺の眸中たとひ萬象萬化の妄影を現出すとも本覺其者は純淨皎潔と諸種の妄を離れたるものなり之れを名て法出離鏡と云第三又鏡眸穢るゝとなく清淨潔白なるが故に之を高臺に掛れば萬人の需用に應ずるが如く本覺は美麗皎潔寸毫のよごれもなきものゆる佛陀の高臺に懸れば本覺の大用として能く萬人の機縁に隨ひて佛身を示現し種々の利益を興る之を名て緣薰習鏡と云ふ第十  
 已上四義一喩を以て本覺の性徳を顯示すること如此而して此四義初の二義は在纏の本覺即ち吾人凡夫の境遇に隱覆する本覺に就て論じ後の二義は出纏の本覺即ち佛陀の境遇に顯現する本覺に就て論ずと云か義記の釋なり讀者之を思へ前來説き來る覺の義を茲に圖表すれば左の如し





斯の如く覺の義を辨明するに就き種々の枝條派生すれども其結局は阿黎耶識中の一部  
 分たる覺の義を説明するにあり其不覺の義を説明することは是より下の一大論なり請  
 ふ讀者眼光を轉じて下の講述を見よ

第十節 生滅門第七(不覺の總論)

是より進んで不覺の説明に移んとす即ち阿黎耶識に覺と不覺の兩義ありしたる中に  
 て其覺の義たる一部分は麤粗にも辨じたることゆえ是より論點を轉じ其不覺の義たる  
 一部分の説明に移ることなり而して此不覺の一義は頗る要論にして且つ學者の難ずる  
 所なれば予も精神を籠て講述せんとす請ふ讀者注意あらんことを余は不覺の何者たる  
 を陳んとするに先立ち先づ總論の一節を開けり抑も不覺とは先にも云如く不者無也覺

者明也と訓する文字ゆえ不覺は猶無明といはんか知し而して無明と云は眞理を見るの  
 智明なきに名く既に無明は眞理を見るの智明なきに名けたるものゆえ此無明を呼て迷  
 といひ又妄といふ要するに吾人人間たる者の境遇にありて日夜に現象する心意を凡て  
 不覺なり無明なり迷なり妄なりと名けたるもの也  
 斯く説き來れば人或は言はん如何ぞ吾人の心意を凡て無明といひ不覺と云乎凡そ萬人  
 の中には不覺無明の者も無きに非ずと雖も彼の理學者の如き彼の哲學者の如き幾多の  
 知識を養成して既に眞理の幾分を見付たる者之あることは誠に疑ふべからざる實事な  
 りと余之に答て云ん成程人類界内にありて之を見れば眞理の幾分を見付たりと云べき  
 者もなきに非るべし或は電氣を發明し或は化學的要素を試験し或は物理的運動を觀察  
 せし結果として之を人事に應用し社會を潤益するが如きものは是なり是等の眞理是等の  
 智識は人間の境遇にありて論ぜば姑く之を眞理と云べく又之を知識とも云べし然れど  
 も今云ふ所の眞理は彼の佛院の證悟し得たる眞理なり今云ふ所の無明は佛院の修得し  
 たる大智惠光明より見下して論する無明なり若し佛院の證悟したる眞理より見れば或  
 は之を滄海の一粟と云べく或は之を末端の眞理と云べきなり眞理既に然るゆえ人生の  
 學理に於て知識といひ知惠といふものは凡て無明位中の智力と云べく不覺位中の智識



と云べきものなり豈奚ぞ真正完全無缺究竟の智慧と稱するを得ん  
凡そ學理の研究を見るに若し知を以て論せば其知り得たるとも多々枚擧し難しと雖も  
若し不知を以て論せば知んとして未だ知り得ざると否未だ知んとも欲せざると未だ疑  
問だにも起らざるもの亦枚擧すべからざる程なり宜なる哉スベンセルの如き不可知的  
哲學論の起ると之を要するに人智は頗る不完全なるものなり吾人は不覺の無明に充さ  
れたる者なりと思へ

第十一節 生滅門第八(不覺の本末)

前には覺に就て本覺始覺の別ありて面も始本は不二無別なりと云とを辨じたるか如く  
不覺の義に就ても根本不覺枝末不覺の二種ありとす或は之を根本無明枝末無明とも名  
づく而して始覺本覺は二にして又一なるか如く根本不覺と枝末不覺は二にして又一な  
りとす然り不覺の躰二個あるにあらざれども此が生起の順序を説明するに本末を分け  
ざるべからず此に由て同一無明に根本枝末の二種を分たるものなり故に之を細論すれ  
ば根本と云中には尙本末分るべく枝末と云中にも尙本末に分るべきなり  
然りと雖今之を大別して陳るに先づ根本不覺と云は眞如の理躰に迷ふ初點なり換言す  
れば眞如は虚空の方角を絶し丈尺を亡するが如く平等にして絶言なるものなり常住に

して虚絶なる者なり然るに虚空に東西南北の方角ありと想ひ丈尺を用ひて測るべしと  
想ふが如く平等の眞如に差別の見起り不生滅の眞如に生滅の心起んとす之を名て根本  
不覺と云要するに眞如を眞と覺知せざるものは是れ根本不覺なりと思へ故に論文に不  
如實知如法一故不覺心起といへり

既に眞如を眞如と知らざる根本不覺の無明起ると同時に主客の見起る主客の見起ると  
同時に客觀的の萬物外に主觀的の心實在せるが如く思ひ主客の心の外に客觀的の萬  
物も實在せるが如く思ふて止まざるに至る此主客の見起りて愈々増長し増々確執する  
もの之を名て枝末不覺と云要するに根本不覺に由て起動したる主客の幻化妄象を幻化  
妄象と覺知せず反て之を眞と認め實と想ふものは是れ枝末不覺なりと思へ此枝末不覺に  
由て吾々は種々の煩惱を起し様々の業を造り苦樂の果を招き生死輪轉無窮となる是れ  
凡夫迷界の有様なり

之を喩るに人あり闇夜に道を行きつゝ一の木杭に遇ふとせんか木杭は木杭なりと見る  
は是れ覺なり又明なりと云べし然るに木杭は木杭と見ざるは是れ不覺なり又無明  
なりと云べし而して此不覺あるが爲め之を一の妖怪物と認む而して之を妖怪物と認め  
たるは吾迷なりと悟らず反て之を實の妖怪物なりと確執するも亦不覺枝末なり無明枝末

りといはざるべからず此第二の不覺無明あるが爲め彼れ動くが如く彼れ眼目あるが如く彼れ耳鼻あるが如く彼れ口大にして舌出るが如くに見ゆる爰に於て益々恐れ益々驚きて或は叫び或は走るとあるが如し請ふ讀者此近き喩を以て前の根本不覺枝末不覺の一斑を知れ

第十二節 生滅門第九(眞如と黎耶と無明の三素關係論)

起信論の攻究につき學者の最も困難とするところは(一)無明起因の難と(二)眞前妄後の難と(三)悟後却迷の難と三大要點にあるものゝ如し然り而して此疑問の解釋に苦しむものは眞如と黎耶と無明の三大元素に於る關係論を詳かにせざるに由るものゝ如し故に余は茲に眞如と黎耶と無明の三大元素に於る關係論を詳にかし以て前の三種問難に秋毫の疑惑なから令んと思ふことなり然るに此論や最も幽玄の論なれば其條理を鮮明なら令んが爲め數番の同答を設て解釋せん已下論文ヲ問々指示スルニ就キ其頁數ハ予カ著ス縮册ノ本ニヨルモノ也とす(第一)問て曰無明は何に由て起る乎 答て曰或は眞如に依て起ると云へり或は黎耶に由て生ずと云べし(一)眞如に依て無明起ると云所以は不生不滅平等絶對の眞如に於て生滅差別の見を懷くものは是れ無明なるが故なり例は本來無東西の宇宙に於て東西南北の見を起し或は無際無涯の空間に於て尺丈測量の見を懷くが如き是等の妄見は宇宙或は

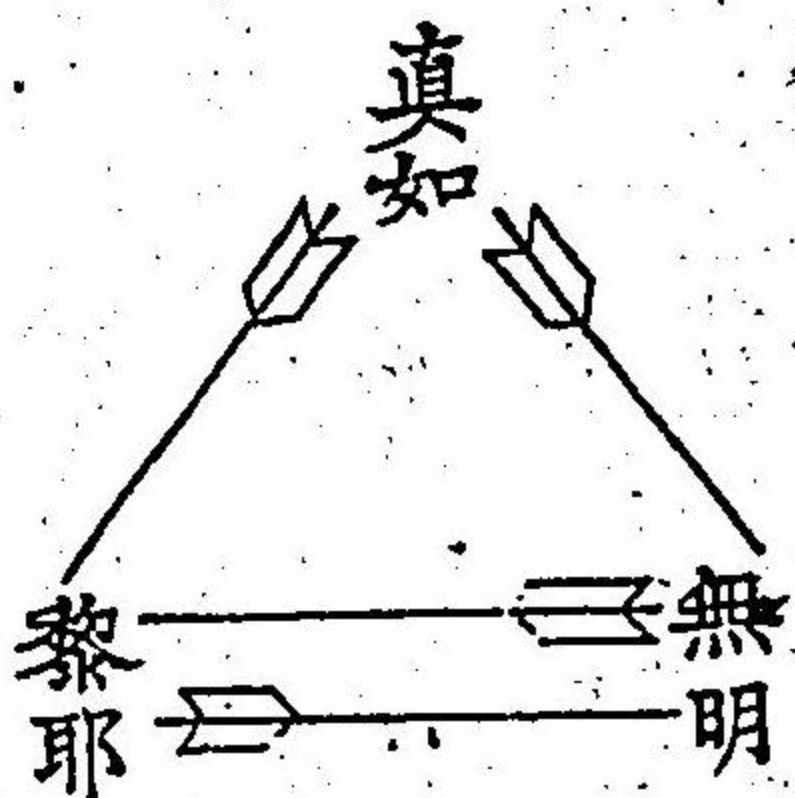
空間に依て生ずと説くべきが如く無明は平等の眞如を平等と知らざる迷見なるが故に之を眞如に依て生ずといはねばならぬ是を以て論文に不如實知眞如法一故不覺心起十四といひ或は依覺故迷といひ或は以不達二法界一故心不相應廿一といひ或は以依眞如法一故有無明廿六といへり(二)黎耶に依て無明起ると云所以は阿黎耶識其者が眞如平等の理を理の如く見ず誤て見るものは是れ無明なるが故なり例せば方角を取違へたる迷は誰に依て起る乎と問へば方角に迷ふたる迷者其人に依て起ると答辨するが如く阿黎耶識に眞理を見るの明なきもの之を無明とするが故に無明は阿黎耶識に依て現出し存在すといはねばならぬ是を以て論文に以依阿黎耶一説有無明十七といへり要するに無明は眞如を因となし黎耶を緣となして現象する二者の中間物なりと思へ(第二)問て曰黎耶は何に由て起る乎 答て曰或は眞如に依て生ずと云へり或は無明に由て起ると云べし(一)眞如に依て黎耶起ると云所以は不變の眞如が隨緣起動と無明の緣に任せて一段起動したる所を阿黎耶識と名くるが故なり例へば不勘不搖を以て本性とする水の風縁に任せて動搖するところを波と名くるが故に波は何に依て起る乎と問へば水に依て波生ずと答るが如く眞如外に阿黎耶なるものあるとなし阿黎耶は眞如の一段動きたる所に名けたる者ゆえ此阿黎耶は何に依て起る乎と問へば眞如に依て

起ると答へねばならぬ是を以て論文に依<sub>レ</sub>如來藏<sub>ニ</sub>故有<sub>ニ</sub>生滅心<sub>ニ</sub>頁<sub>九</sub>といへり(二)に無明に依て阿黎耶識生すと云所以は阿黎耶は真如に依て生ずとは云もの、其真如は不變を以て自己の特性となすものなり既に不變を以て自己の特性となす真如が變動して黎耶となるには何かの事情が無ければならぬ即ち無用の力に由るかゆえ不變の真如が變動して阿黎耶となるなり之を例るに水は不動不搖を以て自己の本性となすものなり既に不動不搖を以て自己の特性となす水が動きて波となるには何かの事情なかるべからず即ち風の力に由るがゆえ不動不搖の水が動搖して波となるなり此に由て波は何に依て生ずる乎の問に答へて風吹くが故に波生ずと云が如く阿黎耶は何に由て起る乎と云問に答へて無明に由て起るといはねばならぬ是を以て論文<sub>十四</sub>に依<sub>レ</sub>不覺<sub>ニ</sub>明<sub>無</sub>故生<sub>ニ</sub>三種相<sub>一</sub>黎耶といひ或は衆生自性清淨心因<sub>ニ</sub>無明風<sub>一</sub>動といへり要するに阿黎耶は覺と不覺の兩成分を含藏するものゆえ真如を因となし無明を緣として出來たるものとす

(第三)問て曰真如は何に由て生ずる乎 答て曰真如は何に依て生ずと云とを説かず此真如は何に由て生じたりと真如の起因を説ざる所以は真如は萬法の實體に名けたるものなるが故なり真如は既に萬法の實體に名けたものゆえ此が起因を論ずべき筈なし若し外に原因とすべきものありて其より發生したる真如なれば其真如は亦滅壞すること

ありといはねばならぬ既に真如が生あり又滅あるものなれば真如を以て萬有の實體とするを得ず凡そ萬有の實體となすべきものは必ず不生不滅と云性質あるものでなければならぬ而して真如は萬有の實體に名けたものなり故に真如は不生不滅なるものとせねばならぬ既に真如は不生不滅なるものなり千古萬古を推すも生じたとなく未來際を尋るも滅するとなさきものとするがゆえ此真如に限り論文に其起因を論じたる處なきなり

己上陳へたる如く真如は無明と黎耶と兩方の爲に原因となれども真如自身は他の原因に由て生じたるものでなきゆえ他に原因を有せざるものとなし又黎耶は無明と真如との兩方を以て自己の生ずる原因となし又無明も真如と黎耶の兩方に以て自己の起る原因となすと云ふ説なり然らば之を圖に表して見ると左の如くなるといはねばならぬ



(第四)問て曰無明と黎耶の關係に就き黎耶は何に由て起る乎と問へば無明に由ると答へ又無明は何に由りて起る乎と問へば復た黎耶に由ると答へたり斯の如きは所謂縛馬二出ル答但論なるものにして事を決すると能はず請ふ縛馬答即ち循環答を止て確かなる決擇をなせ 答て曰余況く佛教を見るに原因結果の理法に多種あり今之を表するに左の如し

(一)時間的異時の因果——善惡因果と云如きものは是なり

別躰相互因果——心境相對の因果の如きは是なり

(二)空間的同時の因果 相互因果——同躰義分因果——無明と阿黎耶の關係論是なり

非相互因果——五根に由て五識生すると云如きは是なり

斯の如く數條の因果ある中に於て無明と黎耶の關係論は相互の因果にして而も同躰義

分の因果と謂ふべし即ち一個物品の兩義を含藏したるに就き甲の點を乙の點より説明を下し復た其乙の點を甲の點より説明を下すものは是なり例せば或る人を何故に文學者と名くる乎の間に答へて彼は能く書物を読み且つ理解するが故に文學者の名を得たりと云ひ更に彼は何故に讀書を以て業とする乎の間に答へて彼は文學者なるが故に讀書を以て業とすと云か如し斯の如く相互の因果殊に同躰義分の因果と云ものは其説明必ず縛馬答になるものなり否縛馬答の循環説でなくは亦説き方もなきものなり而して無明と黎耶の如き二者對立するものにあらざれども真如の躰中に兩義あるところより二者對立するものゝ如く分ち見せたものにて真如は或る人と云が如く黎耶は或る人に文學者の名で得たるが如く無明は或る人に讀書理解の力あるが如く黎耶は迷ひ手なり無明は迷なり斯の如く一躰中の二義を黎耶無明と分つものゆゑ黎耶を無明に由て説き無明を復た黎耶に由て説くと云ふ循環答を用ひたるもの也然らば無明と黎耶の關係は此循環答にて充分に説明し得たものといはねばならぬ

(第五)問て曰既に黎耶と無明を同躰義分の相互因果とすれば此二者に就ては前後を論すべき筈なけれども此黎耶と無明を一組に妄となし此妄を以て彼の真如に對して論ずるときは真如を以て前時の存在となし妄を以て後時の開發とする乎真前妄後ノ疑問是ナリ 答て曰

然らず眞妄共に無始の存在なりとす故に論文<sup>十一</sup>に説無始無明<sup>一</sup>といひ又<sup>四</sup>三頁如來藏無<sup>二</sup>前際<sup>一</sup>故無明之相亦無有<sup>三</sup>始<sup>一</sup>といへり

(第六)問て曰既に眞如何に依て生ずる乎と問へは眞如は不變を以て自家の特性とする自然物なりと答へたり故に此は無始の存在といはねばならぬ然るに黎耶と無明の如きは共に眞如に依て起るものと答へたり既に眞如に依て起る者とせば眞前妄後と云ふが論理上止むを得ざる勢にあらざる乎 答て曰眞如と黎耶と無明の三個は三にして一にして三なること恰も鼎の三足の如く伊字の三點の如きものなり故に眞と云も妄の外に存在するにあらず妄の躰即ち眞なるものなり此意を陳て論文<sup>七</sup>一切法悉皆眞<sup>一</sup>乃至<sup>一</sup>切法皆同如といへり又た妄と云も眞の外に存在するにあらず眞の躰即ち黎耶無明の妄と成れり故に論文<sup>九</sup>に不生不滅(眞)興<sup>二</sup>生滅(妄)和合非一非異といへり既に眞の外に妄なく妄の外に眞なく眞妄は同躰一具中の義分なるか故に其前後を立て、妄未生の時は眞のみ獨存したるものと云如き見を懐くと勿れ

(第七)問て曰前答の如く眞妄は同躰一具中の義分にして分離すべからざる者ゆえ其前後を論すべからすとせば之を黎耶無明の關係の如く眞に依て妄生すると同時に還た妄に依て眞生すと云へし然るに眞に依て妄生すと説て妄に依て眞生すと説かざるゆえ測りて之を無始の太古に及ぼし考察するときは眞前妄後と云疑難免れ得ず請ふ推して其説明を聞ん 答て曰此疑問を氷解せんとするには眞といひ妄といふ論點の區域を心得べし夫れ眞とは何を云乎曰本躰論なり本躰は必ず不生滅てなければならぬ又自存的なればなければならぬ故に論理の法則として眞は妄に依て起ると云とを得す次に妄とは何を云乎曰く現象論なり現象は必ず生滅すべきものなり又依存的なるものなり故に論理の法則として妄は眞に依て起るといはねばならぬ爰に於て眞前妄後と云論者の疑問恐くは氷解し去らん之を要するに吾人は無始の迷者なり曾て悟りたる者の中頃に迷ひ出た者にはあらずと云か佛教なりと思へ

(第八)問て曰前答に依に眞妄共に無始の存在と爲せり然らば亦之を無終の存在となし眞如の無終なるに等しく黎耶無明の妄も盡未來際斷滅するとなさ者とす乎若し眞と等しく妄も斷滅するを得ざる無終物となせば吾人に如何に修行を勵むとも妄を滅して眞を悟り得ると云成佛の期限は斷乎としてある可らずと云痛難あり之を如何する乎 答て曰其始を論ずれば眞妄共に無始の存在なれども其終を論ずれば眞は無終にして妄は有終なりとするが起信論の當意なり然らば眞は無始無終なれども妄は無始有終なりと云べし故に論文<sup>三</sup>復次染法從<sup>二</sup>無始<sup>一</sup>已來熏習不斷乃至得<sup>三</sup>佛後則有<sup>四</sup>斷<sup>一</sup>とあるを

義記下本丁<sup>廿一</sup>釋して染法違<sup>レ</sup>眞無始有終<sup>〇〇〇</sup>といへり

(第九)問て曰凡て始ある者は亦必ず終あり之に反して凡て終あるものは亦必ず始ありと云ふは論理の法則なり然るに黎耶と無明の妄を無始としつゝ又之を有終とするは頗る論理矛盾の説にはあらざる乎 答て曰く然り忽ち之を見るときは論理矛盾せりといはざるを得ず然りと雖も能く之を究るときは論理矛盾の過あるとなきなり天台宗の立論を借て之を辨明せば論者は當に此問題を了解するのみならず前數條の疑問も恐くは青天に白日を見るが如きに至らん請ふ今姑く之を論ぜん抑も天台宗にては眞妄の關係を論ずるに就き性具の論と修起の論とあり其性具の論と云は實體論と云べきが如く即ち起信論の眞如門に相當せり其修起の論と云は現象論と云べきが如く即ち起信論の生滅門に相當せり而して波に非ざる水無さが如く修起に非ざる性具もなく又水に非ざる波なきが如く性具に非る修起もなしとす而して其修起の中には善の修起もあり又惡の修起もあり善惡の二修ありと雖も既に性具に非ざる修起もなく修起に非ざる性具もなく修性は不二同躰なりとするが故に眞如の躰中に善惡二修の徳を元來完具し未來も永久滅するとなしといはねばならぬ若し眞如躰中の屬性として善惡の徳を完具せざれば因に由り縁に任せば或は善の現象を呈し或は惡の現象を呈すべき等なし之を喩るに大

地には元來無限の植物を生ずべき徳を具へたるものなり若し大地に其徳を完具せざれば因縁に任せて櫻や桃や梅や松の如き種々雜多の植物を生ずべき等なきが如し然るに眞如は無差別の一方に限るものなり純粹善の一方に止るものなりと云ふ如きは尙一種の僻論にして未だ完全論にはあらざるものとす 天台に但理隨縁或は縁理斷九の名目あるは意之を嫌ふにあり

已に善惡の二修を共に眞如躰中の性徳となし須臾も眞如の本躰に離れ得ざるものとするが故に性具論の方より論ぜば眞如の無始無終なると共に黎耶無明の妄も無始無終なりといはねばならぬ之を喩るに森然として繁り鬱然として榮へる百草萬樹は凡て地上に具へたる徳の表現なりとして見れば之を地徳の邊より論ずるに百草萬樹生々枯々しつゝ大地と共に古往今來いつも存在してかはるとなすと云ふべきが如し故に起信論にも此意を陳て無明之相不離<sup>レ</sup>覺性<sup>〇</sup>非<sup>〇</sup>可<sup>〇</sup>壞<sup>〇</sup>非<sup>〇</sup>不可<sup>〇</sup>壞<sup>〇</sup> 十一頁より十といへり性具論の方よりいへば斯の如く眞と共に妄も無始無終なりと雖も又之を修起論の方よりいへば妄に其始あるが如く又其終あるが如く説かねばならぬ妄に其始あるが如く又其終あるが如く説かねばならぬ譯は妄は反對的に進修するに隨て善の智明に轉化し惡の妄即ち無明は殆どなきが如くなるものなるが故なり既に妄は轉化して自己の相狀なきが如くなるの終ある者ゆる又此が起點の始あるが如く説かねばならぬは論理の法則

なる故に吾人は本と真如より迷ひ出て、妄想の夢を見て居る者なれば流轉一旦反省心  
起り此妄想を破滅しぬれば復本との真如の故郷に還るとを得る還滅と云様に説たもの  
なり修起論よりいへば斯の如く妄に其終あるのみならず或は其始もあるが如く説てあ  
るなり蓋し妄に其始あるが如く云も又其終あるが如く云も只是れ現象の變化に就て始  
終を語りしものなり現象の變化に就て論をなせば吾々迷者も反對的に善の修起り實踐  
躬行その功積るに隨ひ善の智明、惡の無明(妄)に交代するとあるが故に妄に其終あり  
といはねばならぬ妄に其終ありと説くとは眞實なりと雖も妄に其、始即ち第一の起點  
あるが如く説けるは眞實にあらず只是れ(一)其終あるに對するが故と(二)又妄は眞の動搖  
にして眞の外に存在する者に非ざるが故とを以て妄は眞に依て起ると説て妄に其始の  
あるが如く陳たものなり義記中未十五此隨緣義難名目故或就未起説依眞如二有  
無明或約已起説依黎耶有無明然此二名方盡其義といへり學者此文意深く味  
ふべし要するに性具論に依れば眞妄同體の故に眞如の無始無終なると共に黎耶無明の  
妄も無始無終なれども修起論に依れば眞は無始無終にして妄は無始有終なり修起論よ  
りいへば現象の變化として妄は無始有終なれども性具論の方よりいへば眞妄同體にし  
て無明即明の故に眞と等しく黎耶無明の妄も滅盡する時あるとなさなり天台宗に性惡不  
斷と云者はなり

説き來れば此に論者の呈出せる疑問は恐くは氷解せしならん

(第十)問て曰く前答を以て見るに眞如躰中には元來善惡二修の徳を完具せるものなり  
故に吾人は眞如より迷ひ出て眞如に依りて様々の妄惡を修起したれども又反對の方向  
に進趣すれば此妄惡止んで善良の修起を呈し益々進んで止まざれば遂に佛にも成ると  
を得と云是に由て之を觀れば吾人は一旦悟りを開きて佛と成るも復本の迷に還るとは  
なき乎既に眞如の本體が善惡二修の徳を完具して缺けざるものとして見れば或時は善  
の方向に進み凡夫轉して佛陀となるとあると共に又或時は惡の方向に轉して佛陀も  
復凡夫に還るとあるへしと云疑問を惹起せり之を如何する乎悟後再迷の難  
と云は是なり

答て曰く然り凡夫の手に於ける眞如も佛陀の手に於ける眞如も眞如に二個あるに  
あらず眞如は迷悟一躰佛凡無差なり故に凡夫の方に就て論するとき善惡二修の徳を具  
へたりと云とを得ると共に佛陀の方に就て論するも善惡二修の徳を具へたりといはね  
はならぬ然るに凡夫轉して佛陀と成るとあるも佛陀退て凡夫に還ると云と必ずなき者  
とす其凡夫轉して佛陀と成るとを得るは固より心の本體たる眞如に善の修徳を具へた  
るに由る若し善の徳を具へざりせば佛陀と成ると能はざるのみならず縱ひ如何なる善  
縁に遭遇するも一片の反省心の起るへき善もなきなり抑も凡夫の佛陀に異なるところ

は凡夫は是れ迷者なるか故に未だ真如の是れ善是れ惡なる本性に體達悟入せず未だ真如の本性に體達悟入せざるゆひ真如の徳を自由自在利用すると能はず只修惡の業因縁に束縛せられて不完全極まる身とは成れり然れども固有の徳は佛に異ならざるゆゑ修力一步進めは一分丈自在を得二歩進めは二分丈の自在を得益々進行して止されは遂に其曉は佛果自在の境遇に到達するとを得るなり

又佛陀の退て凡夫に還らざる所以は彼れ佛陀は善修究竟して真如の是れ善是れ惡なる本性に體達悟入せるに由る夫れ佛陀の凡夫に異なるところは佛陀は是れ大覺大悟者なり佛は大覺悟者なるか故に真如の全體を徹悟せり既に真如の全體を悟り極むるか故に修惡を起し修惡の業因縁に束縛せらるゝとなし修惡を起し修惡の業縁に束縛せらるゝとはなければども本來の性惡は尙具足し而も此性惡に體達するが故に性惡を利用すると最も自由自在なり故に佛陀は處生を化益する爲めには如何なる惡身も現せざるなく如何なる惡事も爲さざるなし然れども凡夫私情の知らずして爲す如きにあらず佛は利他の爲めに知て之を爲すものなり佛は知らずして爲さず知て之を爲すが故に惡業繫縛の凡夫に立還るとはなきなり之を喻るに蠢々の愚人は其性徳はあり乍ら修徳なきが故に智者賢者の行跡を爲すと能はざれども賢明なる智者は之を爲んと欲せば蠢々の愚人

が爲すべき事といへども能く爲すとを得る賢者は利益の爲には愚者の行跡をも能く爲すと雖も既に知て之を爲す者ゆゑ賢者退て愚者に還るとは決してなきか如し已上姑く天台宗の教理を起信論の上に應用して論するものなり學者之を叱して汝は教門の區別を見ず法相を混亂せりといはゞ予復何をか云はん

已上數番の問答にて真如無明黎耶と云三大要素の關係論は一往説明したれども尙論者の難しとする真前妄後と悟後再迷と無明起因の三件を一層明了に説明せんが抑も眞に依て妄起るを説くは眞は前に存在して妄は後に起ると云とを示すにあらず此は眞妄同昧を顯はした者なり語を換て之をいはゞ妄は眞昧の具徳なることを表したるものなり若し黎耶は眞如に依て起るといはざれば黎耶は眞如外の存在となる又若し無明は眞如に於て起るといはざれば無明も眞如外の存在となる然るに黎耶無明の妄は眞如の具徳にして眞如外の存在にあらざるゆゑ二者共に眞に依て起ると説くものなり既に黎耶と無明の妄は眞如昧中の具徳にして眞妄は同昧無別となりて見れば無明起因の疑問は爰に氷解し去らん

又黎耶に依て無明あり無明に依て黎耶起ると説くは眞如と等しく黎耶と無明の妄は無始の存在なりと云ことを顯はした者なり語を換て之をいはゞ黎耶も無明も最初の第一



起點を論ずべからずと云とを表したものなり黎耶若し先きに現じ後に無明生ずといはんか既に依て起る黎耶なれば無明の先きに黎耶ありとは云べからず此に由て若し先きに無明ありて後に黎耶生ずるといはんか既に黎耶に依て生ずる無明ある故黎耶の前に無明ありと云べからず此に由て黎耶と無明と前ならず後ならず二者同時に起るといはんか然らば起るべき事情なくして起るとなる本來無なるものが其事情なくして有を生すべき等なし故に黎耶に依て無明生じ無明に依て黎耶起ると云意は眞と等しく妄も無始の存在なりと顯はし以て眞前妄後の疑を拂ふにあり又黎耶と無明を相互の因果とすれば無明去れば黎耶起るべき等なきと共に黎耶止めば無明の生ずべき等もなきなり何となれば無明止めば黎耶生せんとするも生ずべき原因なく黎耶無れば無明の起るべき事情なきが故なり既に然らば黎耶に依て無明あり無明に依て黎耶起ると云ふ相互因果は眞前妄後の疑を去ると同時に亦悟後再迷の疑をも除き得る説方なりといはざるべからず

之を要するに一方にては眞妄別體の僻見を拂て眞妄同體の義を顯示せんが爲めに妄は總て眞に依て起ると説き又一方にては眞前妄後悟後再迷の謬見を除きて眞妄は共に無始の存在にして且つ悟後再迷するとなしと云とを顯示せんが爲めに黎耶無明相互の因果關係を説たものなり故に學者其一方に偏せず兩方合せ取て眞如緣起の深意を了解すべし若し依眞起妄の一方に僻せんか時間的の考、起り易くして眞前妄後の疑團は快く氷解するを得ず若し黎耶と無明と相互因果の一方に止らんか眞妄別體の考、起り易くして妄は何を原質として出來た乎又一旦妄止むも再び現象するとはなき乎の疑問を快く氷解するを得ざるものなり然るに起信論に此兩様の説あるところて是等の大疑問をも氷解するに至る此の趣を陳へたが前に擧たる義記中未<sup>十五</sup>紙の解釋なり學者眼を着け

余は上來冗長を厭はず丁寧反覆以て眞如と無明と黎耶の三大要素につき其關係論を喋々陳べたり蓋し是れ起信論にありて最第一の要論にして學者の殊に難關とするところなるが故なり請ふ讀者その冗長を咎むる勿れ

第十三節 生滅門第十(生滅の順序)

眞如が無明の勢力に由て生滅すと云に就き其生滅の状態を秩序的に分析して或は九相(亦は三細六麤とも云)と分け或は五意と分け或は六染と分てり蓋し五意と云も六染と云も九相を出さるゆゑ今九相を略陳すべし

九相とは(一)業相(二)見相(三)境界相(四)智相(五)相續相(六)執取相(七)計名字相(八)起業相(九)業繫苦

相是なり五意並に意識も此九相の外ならず六染も亦た此中第一の業相を以て起點となし第九の業相は此九相を出てさるるは第八節の圖に於て知れ此中第一の業相を以て起點となし第九の業相は此九相を出てさるるは第八節の圖に於て知れ。此中第一の業相より説明せざるべからず抑も業相とは如何なる意味の名稱なる乎曰く業は運動を意味す即ち妄心の始て動くところ之を業相と名けたり重説するに人なければ睡りなく睡らざれば夢も起らず然るに人あるに由て睡りとあり睡るが故に夢起る此の如く眞如なければ無明もなし無明なければ業相の起る善もなければ眞如あるに依て無明あり無明あると同時に妄想起る此妄想心の起點を業相と名けたり第二見相とは既に妄心起る然らば其妄心起ると同時に主觀的作用なかるべからず之を喻るに夢の起ると同時に夢の主觀的妄念あるが如し此主觀的作用を呼て見相といふ第三境界相とは既に主觀的作用あり然らば此れあると同時に亦客觀的の現象なかるべからず之を喻るに夢中主觀的妄想起ると同時に亦客觀的に種々様々なる事物を現象して或は山水風月或は亡友或は牛馬或は仇敵、何乎蚊乎必ず妄想の勢力に由て變出するが如し此客觀的萬象を呼て境界相といふ第四智相とは智は分別に名く其意は既に客觀的に外境を變出せり無明なかりせば彼は主觀的見相の力に由て變現する幻化なりと悟れども無明あるに由て彼を心内の幻化物と見ずして心外の實在物と認む既に彼を心外の實在物と認むるが故に忽ちに憎愛の分別をなす之れを喻るに夢中の萬境を

非實と見れば喜び怒り恐れ悲しみ泣き笑ふ等なけれども夢に由て之を實物と認るが故に或は喜び或は怒り或は恐れ悲しみ泣き笑ふが如し要するに第三境界相に對し之を實物と認めて種々様々の分別心を懷くところ之を智相といふ第五相續相とは他なし前の智相が連續して絶へざるところ之を相續相といふ第六執取相とは前の智相が相續せざれば好けれども彼れ連續して絶へざるがゆる漸々に外境を實物と認むるの念慮も益々堅くなると共に憎愛分別の妄念も益々深くなりて其執着愈々増し益々堅きに至る之を喻るに夢の相續するに隨ひ夢中非實の幻化を實と想ひ込むの妄情執着ます。深きに至るが如し斯く智相妄分の相續すると同時に執着の深くなるところを呼て執取相といふ第七計名字相とは非實を實と認るの固執粘着深くなると同時に或は怨或は親或は惡或は美或は醜或は是或は非と云様に意中に夫々の名稱を形成して或は愛し或は憎むと云情を惹起す之を喻るに夢中の幻化を愈々實と想ひ込むと同時に彼は朋友なり彼は夫なり妻なり彼は虎狼なり毒蟲なりと云様な名稱を夢中の意識上に拵へて或は喜び或は怒り或は貪り或は厭ふとあるが如し要するに外境實在の執着あるがため貪欲瞋恚等の諸種煩惱を起すところを呼て計名字相といふ第八起業相とは既に貪愛瞋恚等の煩惱を起す然らば其煩惱に身口意が使役せられて十善十惡と云如き種々様々の業を造作する

之を喩るに夢中身を動かし口を開きて或は他を惱害し或は他を救助する等の事あるが如し斯く身口意の三處に種々の業を造り作すところを起業相といふ第九業繫苦相とは業已に造れば此が結果を感受せねばならぬと云は佛教因果の法則なり之を喩るに夢中にありて善事を爲して他の報酬を受け或は惡事を爲して他の復讐を被る等の事あるが如し要するに煩惱以て種々の業を造りなせば其業を原因として其業に束縛せられて夫々の果報を受けて或は苦しみ或は楽しむ有様を業繫苦相といふ（八丁）に出る （已上の夢の譬へは例記） 已上の九相は生滅の状態を秩序的に本末鹿細を辨別したるものなり斯の如く九相と分ち説明すれば時間的に順を追て生起するもの、如く見ゆれども其實は然らず只其時を前後異にするものは第八起業相と第九業繫苦相とのみ此は異熟因異熟果の因果法に相當するものなれば前後時間を異にすといはねばならぬけれども之を除て外は同時に俱生併起するものなり吾人が貪欲以て他物を奪ひ瞋恚以て他を殺害するとありとせんか即ち前八相は同時に具足完全せるものなり而して此九相と云は眞妄の中では妄の方に屬する生滅なり故に之を覺不覺の中では不覺の方に屬し流轉還滅の中では流轉の方に屬する生滅なり然らば之に反し此不覺の妄を消滅する還滅門の生滅なかるべからず其還滅門の生滅も爰に陳ぶべきなれども其は前の第八節に譲りて今は略す請ふ讀者前

第八節を對照せよ然らば其大旨を得ん

第十四節 生滅門第十一（熏習の説明）

已に生滅の状態を陳べたれば是より生滅の因縁を陳べねばならぬ何となれば凡そ結果の現象は細大となく必ず其原因事情を要すと云とは一定の規則なるが故なり然るに余は生滅の因縁を陳るに先立ち熏習と云とを説明しおかんとす何となれば熏習は生滅の因縁に就き直接なる關係ありて熏習と云とを心得ざれば生滅の因縁を悟了するに能はざるが故なり然らば余將に生滅の因縁を陳るに先立ち熏習と云とを説明せんとする意推て知べし （論文は因縁を説ける後に熏習の説明あれども余は之を顛倒す）

余嘗て云佛教中に縁起論と實相論の二大教系ありと而して實相論の教系にては餘り熏習と云とを説かざれども縁起論の教系にては孰れも熏習と云とを論ぜざるはなし即ち般若經、法華經、中論、百論の如き俱舍宗三論宗天台宗の如き實相的の教系なるが故に熏習の沙汰は稀なれども楞伽經、深密經、瑜伽論、唯識論の如き法相宗の如きは縁起的の教系なるが故に熏習の論最も喧すし而して起信論は縁起的の教系なれども眞如門の方にては之を論ぜず生滅門の方にて説くとあり故に論文生滅門の終に至りて四熏習と云とを喋々陳べたり然らば縁起的の生滅門にありて熏習論を必要とすると思て知

れ余今茲に贅辯を爲さるなり  
 問て曰緣起的の教系は何故に熏習論を要する乎 答て曰緣起とは數件の因縁和合して結果を生起するを云而して熏習とは因縁和合につき甲原因は乙原因を撃ち乙原因は甲原因を撃つと云様に數條の原因相依り相撃て結果を生起するの勢力を互に資助するを云之を要するに因縁和合すれば其結果を見るべき理由を説明するものは是れ熏習論なり應に知るべし熏習論は因縁論に直接の關係あれば緣起的の教宗には熏習論を要すると云ことを

蓋し等しく緣起的の教系に屬すれども唯識論と起信論とを對照するに熏習の論じ方異れり彼の唯識論は凡そ能熏となるものは所熏とならず所熏となるものは能熏とならずと定めたり前七識を能熏とし第八識を非能熏とするものはなり然るに起信論は能熏となるものも亦所熏となり所熏とするものも亦能熏となると云説なり眞如と無明と互に能熏所熏となるものと云へるものはなり又た唯識論は眞如を以て能熏の力もなく所熏の義もなきものとし眞如は熏習に係關なきものとす起信論は眞如を以て能熏ともなれば亦た所熏ともなると云へり又た唯識論は無明を以て能熏とはなれども所熏とはならずと爲せども起信論は無明が能熏ともなれば所熏ともなると説けり是れ眞如を利用せざる權大乘と眞如を利用する實大乘と教理に區別あるところ也

之を元曉、法藏の判斷に依れば彼は可思議熏の論と云へく此は不思議熏の論と云べし彼を可思議熏の論と云所以は差別の見解に滯りて尋常一樣の解釋をなす者なるが故なり又此を不思議熏の論と云所以は差別の點より無差別の點に推及し眞如も無明も共に能熏ともなれば所熏ともなると尋常論の區域を一步超へて論ずるが故なり而して其尋常論の範圍を超越したる所は如何曰く眞如は純善純淨を以て自己の性質とす凡そ香氣優れたる物は他の香氣を容れざるが如く此と反對せる妄惡の熏を受くべき筈のなきものなり又眞如は不變を以て自己の特性となす然らば金石に變化の象見を難きが如く妄惡の熏に由て妄惡と變化すべき筈のなきものなり然るに眞如は己れと反對せる妄惡の熏を受て妄惡と轉化すと説く豈道理已外の論ならずや豈尋常論の區域を超越したる論ならずや又無明は本來躰のなきものなり躰なきものは他の熏を受くべき筈もなく亦諸種の現象を發生すべき筈もなし然るに無躰の無明が他の熏を受けて諸種の現象を發生すと説く豈不思議の論ならずや豈尋常一樣の論と云べけんや蓋し眞妄染淨は同躰中の二義無差別中の差別なるが故に此不思議熏の論あるものなり義記中本紙八に具さに論ぜり乞ふ參見せよ

問て曰熏習と云語は如何なる意味を有する乎 答て曰熏は熏發の義に名け習は習修の

義に名く然らば熏習とは人爲の修力造作に關はる語なり人爲の修力以て苦樂昇沈の結果を擧發するを熏習の意味とす故に佛教の緣起論即ち迷ふ所以并に悟る所以を主觀的に説明せんと欲せば此熏習論の必要なると多辯を費さずして知り得べきのみ

余は是より熏習の道理を陳んとするに姑く眞如の語を改めて覺とし之に對する無明の名を改めて不覺とし以て其重變の趣を陳んとす之につき讀者は先づ絶對無限の眞如躰中には本來覺と不覺の兩義を含藏し居るものと思へ換言すれば眞如といへる理躰の中には元來善と惡との兩分子を保存し居るものとするが佛教なりと思へ姑く台宗の教理による然る後この修力的人爲の熏習と云とを悟了あれ

抑も熏習とは余先きに云如く甲原因の力を以て乙原因を撃ち乙原因の力を以て甲原因を撃つ所に名けたる者なり而して何故に甲原因の力能く乙原因を撃つ乎曰く修力に由て此事を爲し得るなり乙原因の力能く甲原因を撃つのは亦爾り而して何をか甲原因と名け乙原因と名くる乎曰く余は眞如躰中に含藏せる覺と不覺の兩部を甲原因乙原因と名けたり之に依て甲原因即ち覺の部分と乙原因即ち不覺の部分と修力の優りたる方より修力の劣れる方を撃ち兩部互に相撃つところ孰れにても修力の優りたる方を勝を制する者は是を熏習と云ふ此熏習の如何に由て迷悟苦樂の諸現象を見るものなり今姑

らく不覺の勢力一段進むとせんか即ち覺の方は一段退歩すといはざるべからず之を不覺の方より覺の方に熏習せるがゆえ覺は不覺の熏を受けて不覺の狀に變化するものとす更に不覺の方二段進むとせんか覺の方は二段退歩すと云へく三段四段五段と一方進むに隨て一方退くといはねばならぬ又之に反し覺の勢力一段進むとせんか即ち不覺の方は一段退歩すといはねばならぬ之を覺の方より不覺の方に熏習せるがゆえ不覺は覺の熏習を受けて覺の方に變化するものとす更に覺の勢力二段進むとせんか不覺の方は二段退歩すと云へく三段四段五段と一方進むに隨て一方は退くといはねばならぬ之を喩るに水は流動躰なると共に又固形躰の性質を有す去ればこそ水轉して氷となり氷化して水と成るが如し一個の水に兩般の性質ありて或は流動躰と成り或は固形躰と成るが如く平等絶對の眞如躰中に覺と不覺の兩點を含藏せるがゆえ一方の勢力發達すれば一方の勢力退歩し其極終に有れとも殆どなきが如くなるに至るは即ち甲より乙を撃ち又乙より甲を撃つ所なり而して覺の方が進んで不覺の方を撃ち又不覺の方が進んで覺の方を撃つは抑も如何なる事情に由る乎曰く他なし修力實に其事情たり姑く惡の修力を重すとせんか即ち是れ不覺の方より覺の方に熏習し彼を擧動して彼の覺性を轉じ不覺の相となさしむる所なり又姑く善の修力を重ぬとせんか即ち是れ覺の方より不覺の方に熏

習し彼を撃動して彼の不覺の相を變し覺の相となさしむる所なり既に然らば熏習は甲乙相擊の義なり而して甲乙相擊は必ず修力に由るものなり故に余は人為の修力を以て甲乙相擊の熏習を説明するとは適當の説明なりとす 論文四熏習の下に此意を得て見よ

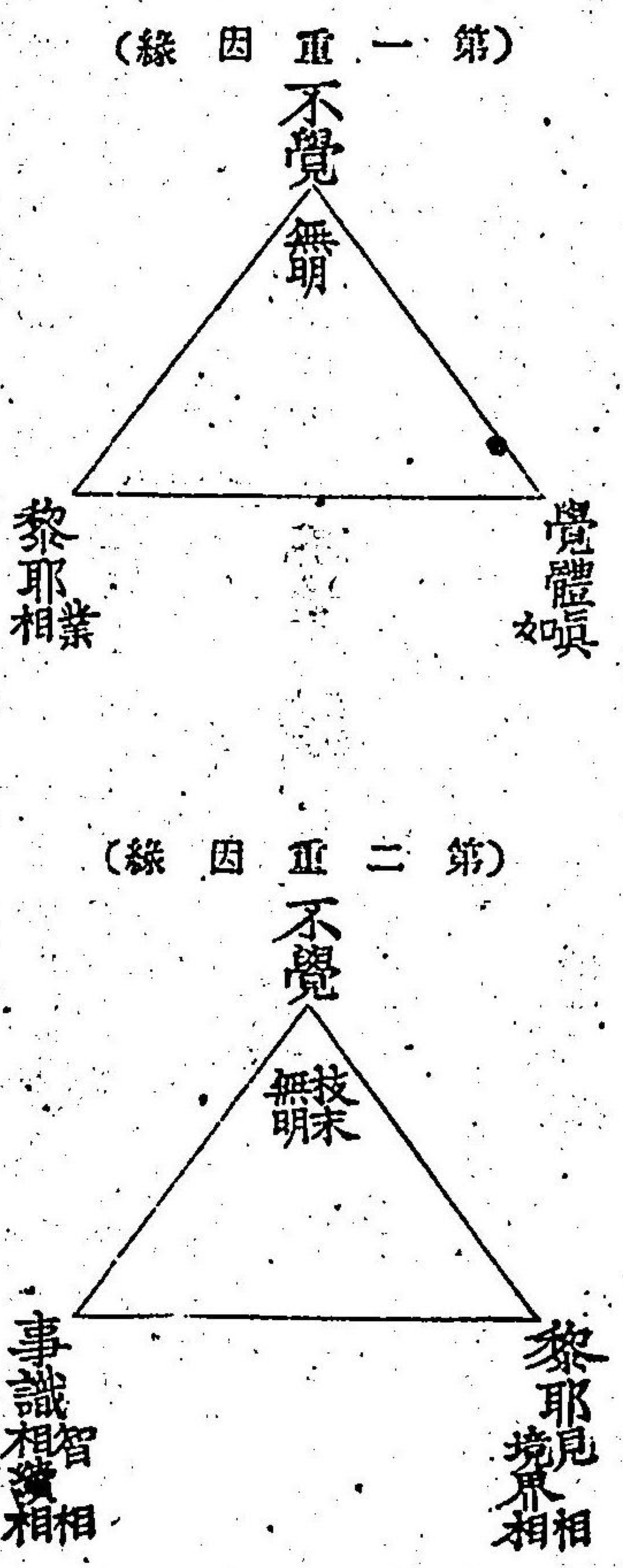
第十五條 生滅門第十二(生滅の因縁)

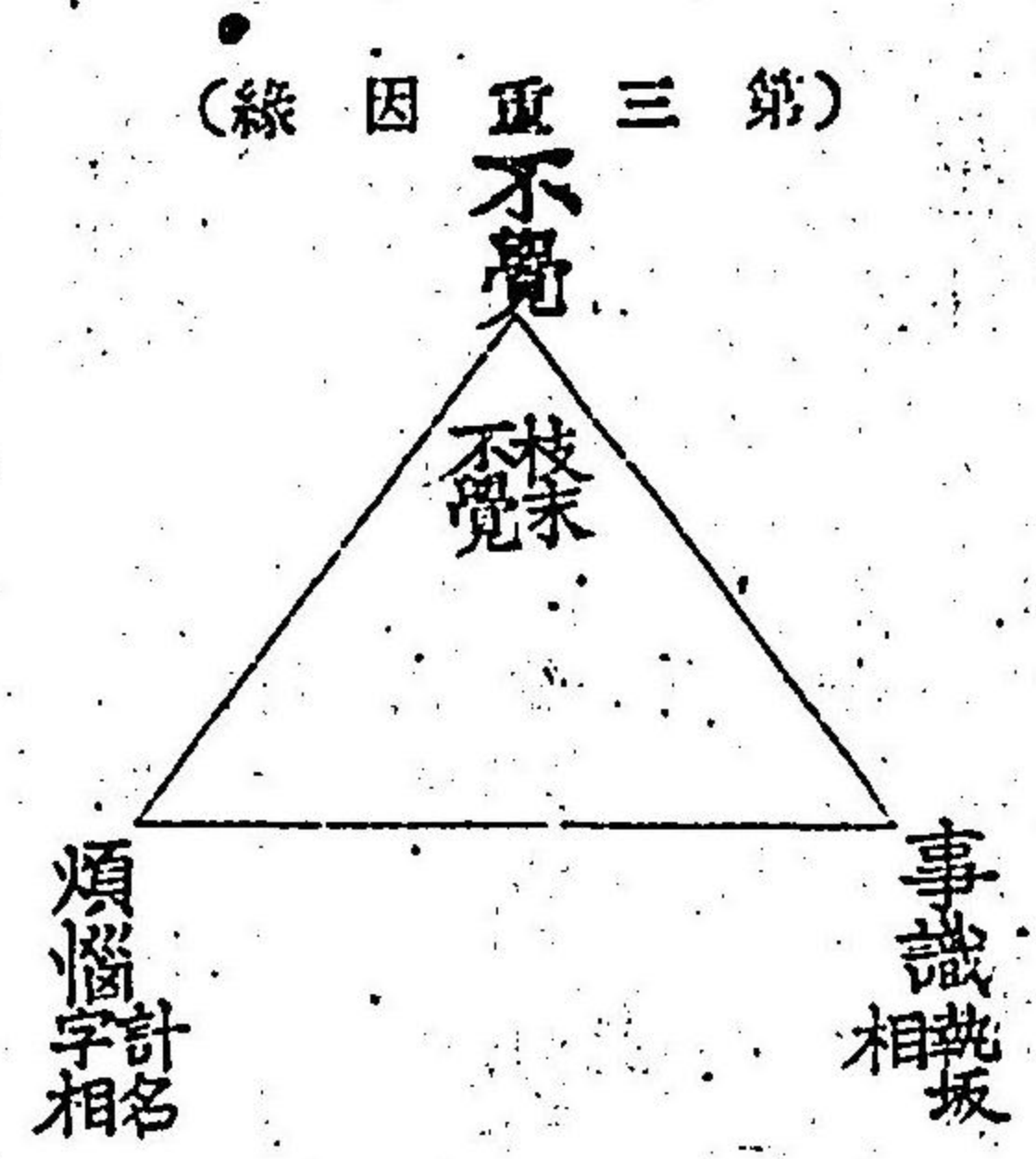
前章に次て辯明すべきは生滅の因縁なり故に余は茲に生滅の因縁を述て生滅門の結を取んとす

凡そ百般の現象を見るは皆其原因あるに由ると云とは普通の學理にありて證明するが如く佛陀の教理亦此規則の外ならず然らば生滅門につき不覺の點進んで迷界百般の現象を呈するも又た覺の點進んで悟界百般の現象を呈するも此が因縁なかるべからず必ず此あるべき筈なり而して此が因縁を起信論に如何か説明する乎と云に大要兩部に分れたり一に迷的因縁二に悟的因縁是なり而して其迷的因縁も其悟的因縁も因縁其者に殊別ありと云にはあらず因縁其者を調れば二者同じく眞如體中の覺と不覺との兩分子是なり同じ覺と不覺の二元素が熏習の事情異なるに由り或は迷的因縁と成り或は悟的因縁と成る故に此兩部を分て辯明せんとす請ふ先づ迷的因縁より説ん

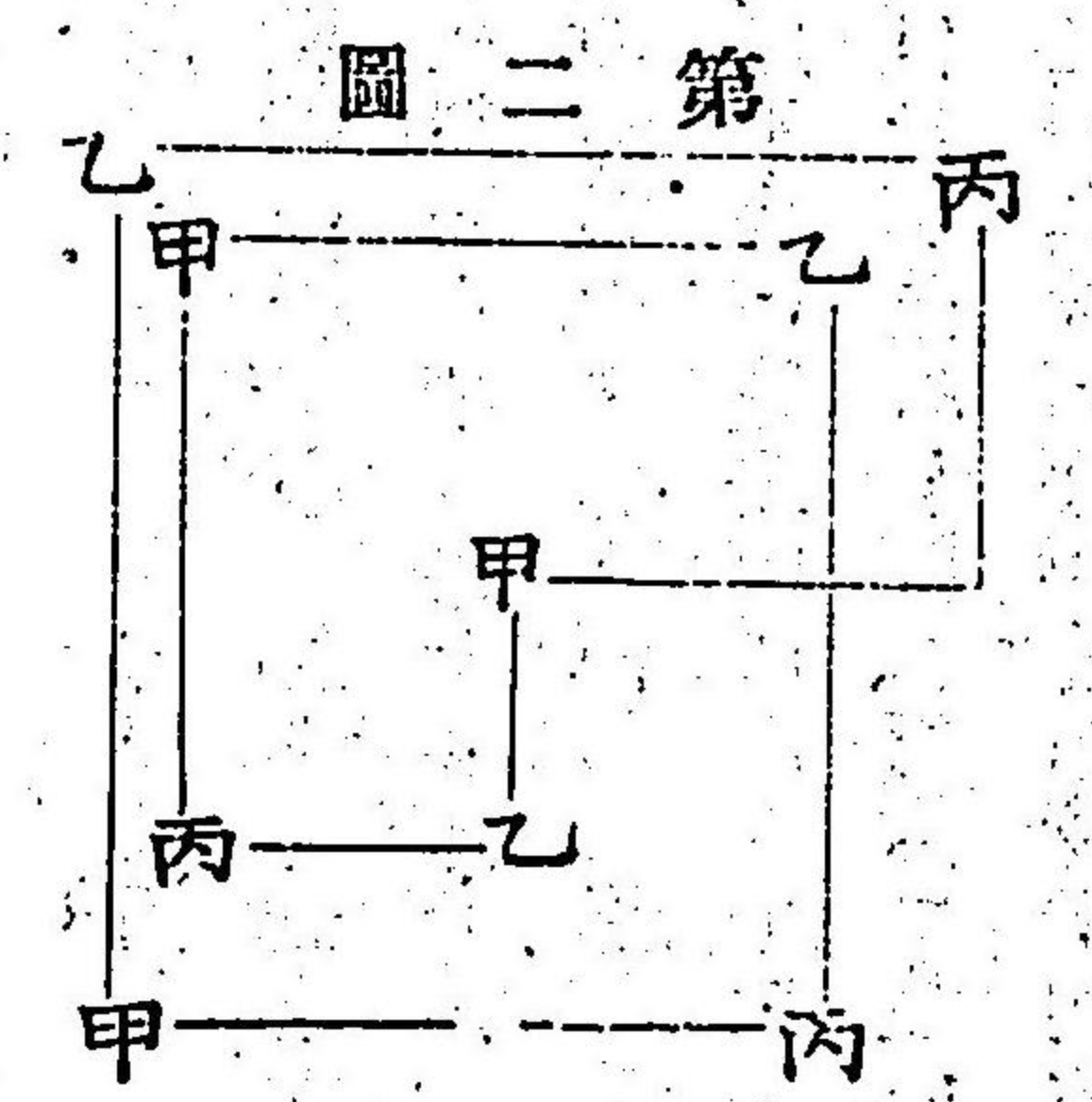
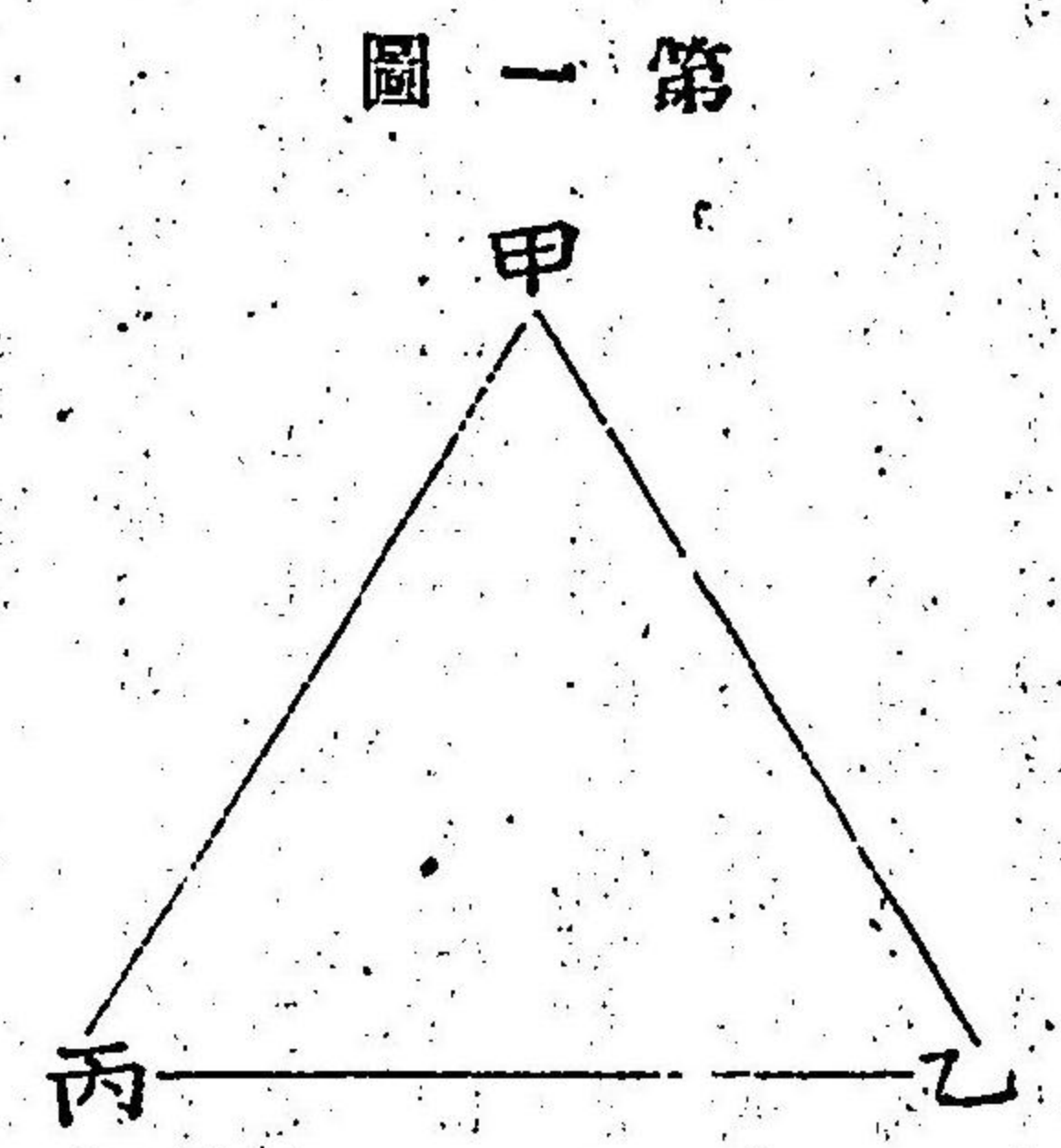
迷的因縁につき因と指すものは不覺根本是なり縁と指すものは覺如是より不覺の因と

覺の縁と和合照したるところ之を不覺と覺の因縁和合に由て黎耶を生ずと云ふ(之を第一重の因縁となす)既に黎耶生ずると同時に其黎耶は復た反射的に不覺根本を撃ち彼が力を一層増大ならしめて第二の不覺未を生ず第二の不覺生ずれば更に復た不覺己れを撃動したる黎耶を反射的に撃て事識の塵分別を生ず(之を第二重の因縁となす)既に事識の塵分別生ずると同時に其の事識は復た反射的に不覺を撃ち彼が力を一層強し第三の不覺を生ず第三の不覺生ずれば更に復た不覺己れを撃動したる事識を反射的に撃て事識の上に種々の煩惱を起し様々の惡業を造らしむるに至る(之を第三重の因縁となす)之を圖に表すれば左の如し





斯の如く本末庵細を辨別すると當に三重に限るとにあらざる更に幾重にも分るとなれども今は要約して三重となす更に此三重を合論するときは三重は第一重に結歸す三重は第一重に歸するが故に生滅の因縁他にあらず不覺無明の風ありて能く眞如覺體の水を撃つ覺は不覺の風に撃たるゝに由て黎耶の波を生ず其黎耶は反て復た不覺を撃ち不覺復た黎耶を撃つといふ循環因果なり他語以て之をいはは甲より乙を撃つに由て乙より丙を生ず而して其丙反て甲を撃つに由て甲復た乙を叩きて丙を生せしむと云意味なり之を圖表すれば左の如し



第一圖は三重合併の循環因果を表す第二圖は三重差別して本末庵細の異あることを表す問て曰既に三法の循環撃發を以て生滅の因縁なりとす然らば三法いづれを以て因となし又いづれを縁となすも勝手たるべし何ぞ不覺を因となし覺を縁となして黎耶を生ずと定めたる乎 答て曰問難の如く理論上では三法孰れを以て因となすも妨げなき筈なり然るに論文多く不覺無明を以て因となし萬象萬化は不覺を以て根源となす不覺あるが故に萬象萬化方に生ず不覺滅すれば萬象萬化亦た共に滅すと説けり九相並に染熏習下の論文を見よ斯の如く不覺の一元能く萬象の多元をし不覺の一元滅すれば萬象の多元隨て滅すと説

く所以は例せば色眼鏡をかけたれば天地萬物皆其色を帯て現す色眼鏡をはづせは天地萬物凡て本色を現するが如く不覺の無明突如として起れば萬象も眞如も皆盡く妄境となりて其本性を失す不覺の無明去りぬれば妄境凡て消へ眞如も萬法も各自の本性に復す然らば悟者の位置より論せば妄境もなく無明もなげれども若し迷者の位置より論せば全宇宙一として妄境ならざるはなく而して其忘境は一として不覺の無明に由らざるはなし之に依て迷の因縁を悟るには不覺の一元生すれば諸種妄想界の多元生す不覺の一元滅すれば諸種妄想界の多元方に滅すと云とを顯さん爲に不覺を以て萬象萬化の一元となしたるものなり

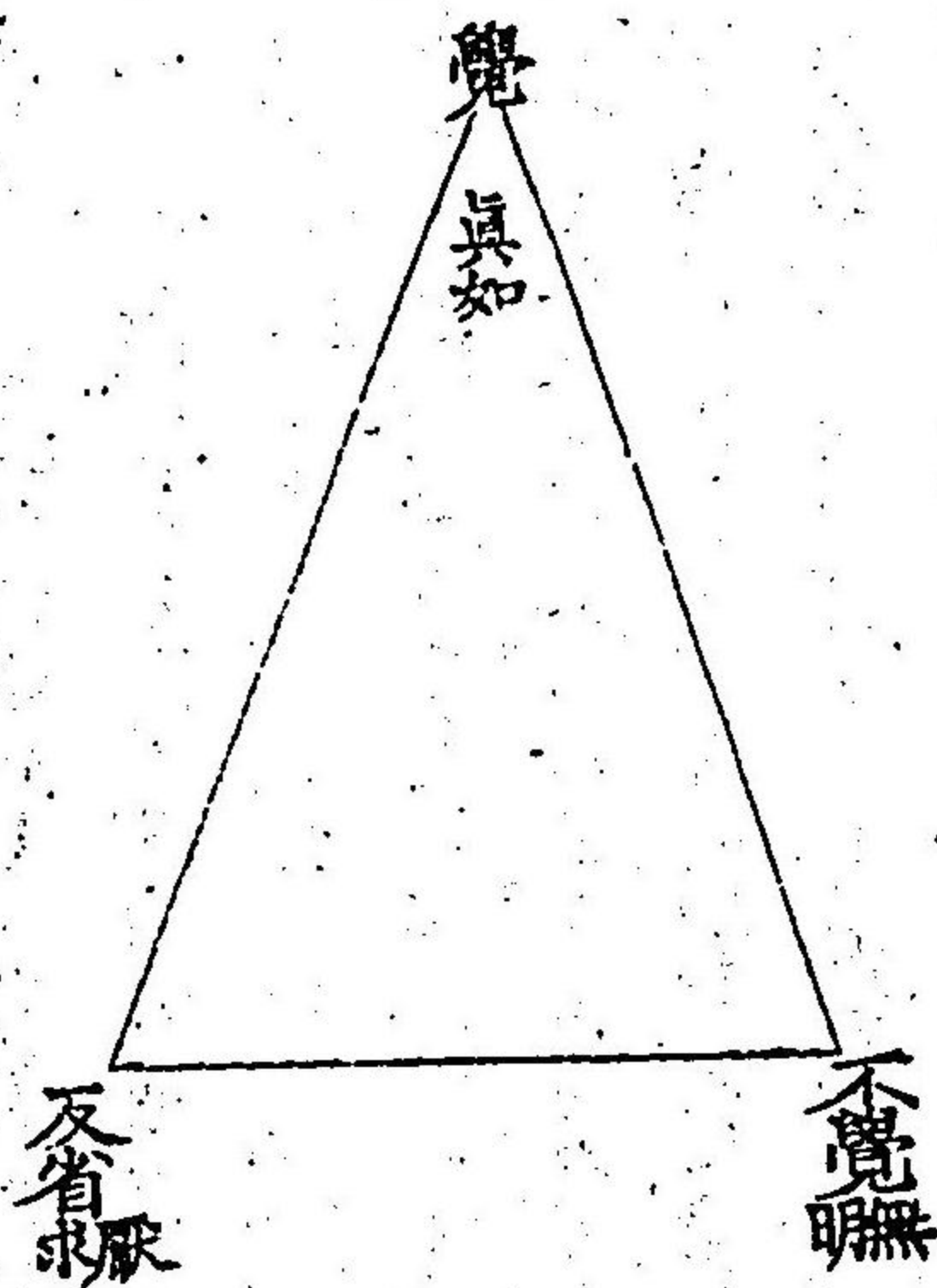
是より更に進んで悟的因縁を説んか悟的因縁は前に反し覺を以て因となし不覺を以て縁となし以て不覺已れを厭ひ覺を欣び求る反省の厭求心を生ずと云組立なり蓋し不覺を以て悟のための縁とすると頗る聞え難きに似たり請ふ之を陳述せん  
凡そ悟を究竟する道の心は皆盡く根本不覺の範圍中にあり而して迷苦を厭ひ悟樂を求め諸種の善を積み徳を累る百般の勤行は皆此不覺の範圍中にありて之を爲す故に不覺を以て悟の縁となしたるものなり蓋し不覺自身が已れを厭ひ嫌ふて彼の覺即ち眞如を證り得んと欲する厭求の意志は抑も何に由て發起する乎不覺自身の力なる乎將た他に

之を發起せしむる者ありて然る乎と尋るに覺即ち眞如の力能く之を發起せしむるものとす然らば如何にして覺即ち眞如は之を發起せしむる乎曰く論文之に就て體熏と用熏を分て辨ぜり其意は堅氷も其性や流水なり堅氷の性已に流水なるが故に堅氷亦解て流水と成る堅氷の本性流水ならずば彼れ解て水と成るべき筈なし然らば堅氷の解くるは一に自己本性の力に由るといはねばならぬ此の如く不覺の本體は清淨なる覺體(眞如)なり故にたとひ氷となるも其本性の點より論せば彼れ自ら解けて水とならんとすと云ふべきが如く不覺も其本體實性の點より論せば不覺止んで覺に復らんとせるものなりといはねばならぬ之を名けて眞如の體熏といふ自動的作用の如し然り而して堅氷の解くるには亦太陽の如き外縁を要するものなり自己の本性は解て水と成らんとするも熱度の外縁なければ解ると能はず之に由て堅氷の解るは二に外界の事情に由るといはねばならぬ此の如く如何に眞如の體熏ありとも亦佛陀の教訓に藉らねば反省の厭求心は起らぬ然るに内部に覺體を具ふると共に外部より善き教訓の刺撃を受る即ち覺體眞如の徳を自由自在に利用せる佛の教訓を被るが故に反省して悟の方向に轉ずるとを得る者とす之を名け眞如の用熏といへり恰も受動的作用といはんが如し(余は爰に感應道交の原理を台宗の教理に據て辨ずると頗る必要と感ずれども今は其暇なし)已上體熏用熏の二大力に由て不覺の上に



反省の厭求心を發起するものと思へ

然らば悟的因縁も迷的因縁と同じく三法の循環因果なること知るべし其表左の如し



此三法亦循環因果なるとは最初に覺より用體照不覺を撃つ覺より不覺を撃つに由て反省の意志を發起す第一既に反省の意志即ち善心を發起するに由て更に復た反省心より覺を鼓動して彼の體熏用熏の力を増す彼の力増すに由て不覺更に進んで増大の反省心を發起す第二反省心増長するに隨て覺を鼓動すると愈々強し爰に於て覺は愈々不覺を撃つと切なり覺の不覺を撃つと愈々切なるに隨ひ不覺より反省心を益々強め善を修し徳

を積むと大なるに至る第三斯の如く因果循環して遂に究竟の悟界即ち佛界に到達すと云ふか因の智果なり

問て曰迷的因縁には不覺を因として覺を縁となす然るに悟的因縁は之に反し覺を因となし不覺を縁となすは如何 答て曰是れ迷的因縁と悟的因縁と其組織異なる所なり抑も迷的因縁とは何ぞや曰く萬象萬化が凡て不覺境裏の現象となるの因縁是なり故に迷的因縁を悟るには不覺の一元これ萬象の源因なりと極めねばならぬ又悟的因縁とは何ぞや曰く萬象萬化が凡て覺心境裏の現象となるの因縁是なり故に悟的因縁を語るには覺の一元これ萬象の大源なりと定めねばならず余爰に於て論文を通觀するに生滅の因縁に三重の意を含めるもの、如し

(一)眞如是れ萬象萬化の大源なりとするの因縁曰く覺不覺の別を見ず超絶的絶對的の眞如を以て生滅百般の本體となし凡ての生滅は此絶對的眞如より開發するものとす即ち論文の初に眞如門を説き次に生滅門を説き其生滅門を説く初めに依<sub>二</sub>如來藏<sub>一</sub>有<sub>二</sub>生滅心<sub>一</sub>といへるところ是なり

(二)不覺是れ萬象萬化の大源なりとするの因縁曰く前の眞如體中に覺不覺の兩義を分ち其不覺の方を以て生滅百般の現象を呈するの根源となす即ち九相を説く一段の論文并

に妄熏習を説く一段の論文の如き是れなり  
 三覺是れ萬象萬化の大源なりとするの因縁曰く亦真如體中に兩義を分ち其覺の方を以て生滅百般を呈するの根源なりとす即ち淨熏習を説く一段の論文の如き是なり五意を説く論文並に本覺始覺を説く一段の論文の如き亦此に屬すべし  
 已上三重の中余は第一を超絶論とし第二第三を主觀論とす而して其主觀論の中第二を流轉論と名け第三を還滅論と名く又第一は總論にして第二第三は別論なり其別論の中第二を迷界論と名け第三は悟界論と名んとす(已上生滅門終る)

第十六節真如と生滅の融合論

解釋分の大意を陳るにつき余は第一節に真如門と生滅門の二大部を分て二門の不一不異なる道理を示し第二節已後は其不一なる點につき初に真如門の主旨を陳べ第三節第四節を見らるべし次に生滅門の主旨を第五節より第十節に至る陳べたり今や最初に立歸り其不一なる點につき二門の融合を論辨し以て解釋分の結論に供せんとす請ふ讀者第二節と對照あらんことを夫れ真如とは如何なるもの乎曰く萬象萬化此中に地獄界よりの實躰に名く又生滅とは如何なるもの乎曰く萬象萬化の當相に名く然らば真如と生滅は躰象の辨別なり而して躰は象に由て出来るものにあらずれども象は躰に依て表現すと云べし故に余前節に三重の

因縁を陳べたる中の第一重に真如は是れ萬象萬化の大源なりと云ふ蓋し是れ不一門の論なるのみ

今や不一論を進めて不異論に移らんとす而して躰眞如象生を不異なりとする論理の組立は第一節の如し今や其不異なる状態を陳べんとす而して躰象互に融合して不異なる模様は論文處々に水波の喩へを利用せり義記は楞伽經に據り金具の喩並に泥團微塵の喩を應用せり(義記中本二二三全十二の如し)今や金具の喩に就て論ぜん茲に金を以て鑄造したる美麗嚴

飾の花瓶或は人像ありとせんか之を躰象と分て論ずるときは金は本と花瓶にあらず人像にあらず既に花瓶にあらず人像にあらずるゆえ之を圓といはんか否、之を方といはんか否、之を橢といはんか否之を長といはんか否、之を短といはんか否と、云様に其説明總て否定的となる只之を肯定的に述る方は花瓶人像の實躰是なりと云一方あるのみ今真如も亦然り之を善といはんか否、之を惡といはんか否、之を實物といはんか否之を虚物といはんか否、之を主觀的に心といはんか否、之を客觀的に物といはんか否、之を躰一といはんか否、之を躰別といはんか否、之を相對的といはんか否、之を絶對的といはんか否と云様に百千萬言を以てするも其説明や皆否定的となる論文に眞如自性非有相非無相非非有相非非無相非有無俱相非二相非異相非非一相

非<sub>二</sub>非異相<sub>一</sub>非<sub>二</sub>異俱相<sub>一</sub>といへるものはなり只之を肯定的に陳る方は萬象萬化の實躰なりと云一方あるのみ故に論文に心眞如者即是一法界大總相法門躰といへり然り而して否定的に説明すべき金の外に肯定的に此は花瓶なり此は人形なり又此花瓶は四角なり圓形なり長形なり短形なり又此人形は頭を低れたり手伸ばせり足屈めりと云如き差別的相對的の物あるかと尋るに金の外には斯の如き差別的相對的の象を見出すと能はず差別的相對的の形象全部すべて是れ金ならざるはなし故に花瓶或は人形の全部少しも餘すとなく此は金なりと云とを得る只之を金なりと云とを得るのみならず亦全體を呼て此は花瓶なり或は人形なりと云とを得る何となれば金の全體が花瓶或は人形と成り居るが故なり今眞如の生滅に於ける關係も亦斯の如し眞如の外に天なり地なり物なり心なり迷なり悟なりと云如き差別的相對的肯定的の生滅界諸現象が別に存在するかと尋るに眞如の外には一塵もあるとなし鬼も眞如の表象なり佛も眞如の表現なり故に天地萬物凡て眞如ならざるはなしと云とを得る故に論文に以<sub>二</sub>一切法悉皆眞如<sub>一</sub>故<sub>二</sub>以<sub>二</sub>一切法皆同如<sub>一</sub>故といへり嘗に生滅界の萬有是れ眞如なりと云とを得るのみならず眞如を呼て是れ生滅界の萬象なりと云とを得る何となれば眞如の水が生滅界萬象萬化の波浪と成り居るが故なり是を以て論文に以<sub>二</sub>是<sub>二</sub>一門不<sub>二</sub>相離<sub>一</sub>故といへり

眞如と生滅と二門の融合は主旨如此尙茲に一言の要すべきとは眞如は否定的なるが故に又肯定的の萬象萬化を發現すと云と是なり抑も眞如を何故に否定的に説明する乎曰く一に迷者の意識を以ては知り得べからざるが故に二に彼は甲とも乙とも丙とも一定せざるが故との二大理由ありて之を否定的に説明し或は之を空とも名く蓋し彼れ甲とも乙とも丙とも一定せざると共に又因縁によりて甲であれ乙であれ何ても蚊でも表現する徳を有せり彼れ萬象萬化を呈出すべき徳を具へたるが故に時に依ては鬼の境遇を現し或は佛の境遇を顯はす彼れ若し甲と一定せんか然らば乙となる能はず彼れ若し乙と一定せんか然らば丙となると能はず然るに彼れ甲とも乙とも一定せざるが故に或は甲もと成り或は乙ともなる之を天台には雙非雙照と云ふ(已上解釋分の顯示正義段終る餘の二段は畧す)

#### 第四章 修行信心分

余は第二章中第一節に於て起信論と云は全部五大段に分れたれども其正説は中間の三大段にあり故に今は中間の三大段の意を畧述せんと約したり而して已に立義分と解釋分の概要を述べたれば是より進んで修行信心分の大意を講述すべき筈なり然れども事務纏集之を詳説するを得ず只其大略を一言しおかん

抑も前來喋々説き來るところは大乗佛教の理論なり今此の修行信心分と云は、大乗佛教の實踐論なり之を題目に當れば前は、大乗の二字に當り今は起信の二字に當ると思へ凡そ普通の學問と雖も多少實踐を要せざるものなし然れども彼の理學の如き彼の西洋哲學の如きは理論主義と云傾きあり今佛教は然らず其理論最も高く最も優れたりと雖も凡ての理論は實踐躬行を目的とせざるはなし故に佛教は理論主義といはんよりも寧ろ實踐主義といはん方適當なり然るに余は實踐論と謂べき修行信心分を茲に略すと云は余が本意否佛教の本意に非れども亦止むを得ざる事情あればなり

論文に修行信心分を説く初めに眞如を信ずると佛寶を信ずると法寶を信ずると僧寶を信ずると四種の信心を列ね此信心を成せしむる爲めに(一)布施(二)持戒(三)忍辱(四)精進(五)止觀と云五種の修行を定め以て吾人が眞如を信じ眞如を悟る方法を指示せり而して其終りに臨み尙世務繁さがため或は煩惱深さが爲め此五行を實修するに由しなく五行を實修せざるゆゑ四種の信心を發起するに由しなく四種の信心を發起するに由しなきゆゑ眞如を悟り得るに由しなき者の爲めには佛陀の大慈大悲是等の者を漏し難く尙特別に眞如を悟り得べき方法を設けたり何事や是れなるぞ曰く往生淨土の他力法是なり故に之を行し之を信ずると能はざる者は一心一向に阿彌陀佛の本願力を憶念し彼佛の名號

を稱念せよ然らば彼佛の本願力に牽かれて來世は彼佛の國に住生するとを得て遂に眞如を悟り窮め佛陀の位置を占るに至ると吾人を誘引する馬鳴論師悲化の説法にて修行信心分の終を結んであり爰に於て讀者之を思へ日本に於て盛んなる淨土門他力の教と云は源と此起信論にも出てたりと云ふことを(完)

## 曹洞宗青年第二回夏期講習會記事

委員 木村泰賢記

### 開會の趣意

惟ふに本宗には古來より結制安居の制定められ、雲兒水弟互に知識を研磨し、信念を陶冶する機關備はれりと雖も、末法の澆季遂に一の虚儀に過ぎざるに至り、短期の間に學界の趨勢を探り、新知識の獲得を務めんとするものあるも、之れに依て其目的を達するに由なく、更に科學哲學の冷き智識に生死問題に煩悶しつゝあるもの、若しくは平生政海に商界に忙殺されつゝある者の、夏期休暇を利用して禪機に參せんとするものあるも誰れか此要求に應ずるものぞ、曹洞宗青年會の夏期講習會を設くるは實に此缺を補ひ、此要求に應ぜんが爲めなり、僅々二周間の短日、吾人は之を以て知識の普及を圖ると言はじ、將た、禪機の堂奥に達せしむると言はず、唯だ吾人は前記の要求に應じて、夏期一點の清涼劑たらしめば足るのみ、

吾人は此見地よりして、昨年第一回夏期講習會を開設するや、江湖の翼賛は殆ど吾人

が豫想外に出て、一百有餘の會員は皆悉く満足喜悅の意を表され、且つ其成績に於ても亦頗る見るべきものありしは、吾人の竊かに光榮とせし處なりき、茲を以て吾人は講習會を以て曹洞宗青年會が執るべき例年の事業の一に加へ、微力を盡して飽くまで之を繼續し、イサ、か教界に貢獻する處あらんと欲し、即ち茲に復た第二回夏季講習會を開設したる所以なり

曹洞宗夏季講習會略則  
青年會

- 一、會期明治三十五七月十日より同二十三日まで
- 一、會場、東京麻布區曹洞宗大學林大講堂
- 一、時間、毎日午前七時より同十一時まで正科々外講義午後
- 一、學科及受持講師
  - 一、碧巖錄 越大本山貫首猊下
  - 一、正法辨道話 能大本山貫首猊下
  - 一、起信論大意 村上專精君
  - 一、大乘止觀頌 大内青巒君

- 一、心理學綱要 ドクトルナブ  
フイロツヒ 中島泰藏君
  - 一、憲法要義 法學士 齋藤美知磨君
- 其他臨時講演大家數名

- 一、聽講料、金壹圓貳拾錢
- 一、申込手續、聽講希望者は前日までに住所姓名を記して申込むべし
- 一、止宿、會員にして大學林へ止宿希望する者は、本會の承諾を得て止宿することを  
得、止宿料は實費を徵集す

一、附帶事業、各種學校會堂の參觀、會員茶話會、有志演說、其他數種  
吾人は前述の主意と希望とに依りて本會を開設し、加ふるに、昨歳の講演五位說、修證義、禪宗史、社會學倫理學に重複せしむべからざる等の事情ありて、學科の配當、講師の請聘等には些か意を注ぎたりと信ず特に講習會は學校にあらず、殺風景なる講演をのみ主とするものにあらずして、寧ろ會員の懇和信念の陶冶、即ち聖ホリミツメ集りたらしむるにあれば吾人は此點に最も意を致したりと雖も、其驗著しからざりしは、吾人不肖の然らしむる處慚愧に堪へざるなり、委員は皆無經驗の者なるに、前々日即ち八日には本林の卒業證書授與式あり、送別會、見送等各自多忙を極め、専ら事務を見る能

はざりしかば、萬事不行屈辱にて十日の開會も覺つかなき様なりしも、幸に大學林職員及び先輩諸氏の篤き扶掖によりて、諸事整頓し豫定の時日に開會するを得たるは委員一同の深く謝する處なり、因みに本會の委員としては、祥雲晚成、木村泰賢、保坂哲隆、伊藤道海、光山百川、淺田壽堂、我孫子孝童、古橋祖孝の八名其任に當り、更に昨年の經驗ある峯玄光、水島正三、兒玉祖虔の三氏を顧問として依頼せり。

### 夏期講習會日記

十日、午前七時半より開會す、二百有餘の聽講者は午前七時までには悉皆大講堂に參集したるを以て、それ／＼會員章を交附し、門前には法旗國旗を交叉し、講堂内は優美に莊嚴し、講壇聽講席等準備悉皆調ひたれば、殿鐘を打ちて開會を報じ、越大本山貫主親下を大導師に両祖諷經了りて、峯玄光氏簡單に開會の辭として、智識の稷得以外に本講習會の更に深き目的あるを説明して壇を下りしかば、貫主親下には直ちに智識の稷得と道德の堅固とは反比例になり行くは頗る慨しき次第なれば、學問を勸むると同時に信念の養成を忽にすべからずと懇々垂示され、了りて、本林教頭秋野孝道師は會員に對して撥挨拶々一場の法話を試みられ、不離不即、有無超越の端的を説示せられ、

大に會員をして感動せしめたり、開會の式之にて終り、直ちに講演に入る、午前九時より大内先生の大乗止觀頌の講演、同十時より中島先生の心理學の講演ありて、十一時此日の講演終る、朝より朗かなりし空合俄かに曇りて十時半より劇じき雨となりたれば、會員中雨具の用意なきあり、且つは午後茶話會に出席者の多からんことを望み、急に寮監察に依頼して、通學の會員の爲め、午食を備へたり、午後二時より會員茶話會を開き、木村委員開會の辭を述べ、それより茶菓を配し、會員は各自起立して本籍姓名を告げ、滑稽諧謔を弄するあり、慷慨悲憤するあり、過去の失敗を懺悔するあり、將來の希望を語るあるなど頗る一坐の興を添へたり、餘興として大聲蓄音機數番ありて閉會せしは午後四時なりき、雨猶ほ止まざるを以て、用意なき會員に雨具を貸す。

十一日、晴、午前七時より能山貫主親下の辨道話開講す、時間割には村上博士の起信論大意ある筈なりしも、此日陛下大學に御臨幸の爲め博士もそれに出席したるを以て、大内居士その分をも代りて止觀頌二席を講演して講了としたり、初め居士は證道歌の講義を擔當する豫定なりしも、碧巖辨道話等の提唱あり特に居士は佛教青年會の巡回講師に選ばれたれば、傍々、時間を短縮して止觀頌を講演することとなりたるなり、

十一時解散、午後總監察にて禪史學會ありたり、  
十二日、晴、禪師の辨道話一時間、中島先生の心理學二時間の講演ありて、十二時解散、新入會員二名ありたり、午後委員會を開き、十四日に佛教演説、十九日に學術演説を執行すべく決す。

十三日、曇、講演凡て前日の如し

十四日、終日雨、辨道話、心理學の講演例の如し、村上博士の起信論大意始まる、午後公開演説を執行す、祥雲委員開會の辭を述べ、在田如山師(佛の道)加藤咄堂居士(社會主義に對する佛教徒の態度)大内青巒居士(頌古一則洞山無寒暑處)等諸氏の演説ありて、午後四時半閉會す、雨天と言ひ殊更孟蘭盆會の中日の事として聽衆意外に少く二百名内外に過ぎざりしは遺憾なりき。

十日、曇天にて稍々もすれば降りぬべく見えたるは朝より夕までの今日の空模様なりき、例によりて午前七時より辨道話起信論大意、心理學の講演あり、了りて會員一同後庭にて紀念の爲め撮影す、三光堂廣告の爲め持参したる蓄音機數番ありたり、本林教師秋野老師歸省の途に就かれたるを以て、本會よりは峰、水島、祥雲、木村等新橋まで見送る、

十六日、曇雨少し降る、禪師の辨道話滿講す、心理學、起信論例の如し、午後壹時より會員茶話會を開く、祥雲委員開會の辭を述べ、深作文學士の「健全なる人生觀」てふ題にて沿々一時間半許り、樂天觀も厭世觀も共に正鵠を得たるものにあらず、健全なる人世觀は進化的解脱主義にあることを演説せられたる後、會員の茶話に移り、互に胸襟を開きて談笑懇話し、馬生の二席の講話に隅をはづし、和氣霽々の中四時頃解散す、此日秋野師より寄贈せられたる高王觀音經及び寺口氏より贈られたる雜誌清新を會員に配付す

十七日、雨、中島先生の心理學(十回講義)滿講、村上博士の起信論大意は明十八日に滿講の豫定なりしを、博士の都合によりて、今日二時間引き續き講演せられ、之亦滿講す、午後壹時より女子大學、養育院等參觀の都合なりしが雨天の爲め延引す

十八日、曇、齋藤法學士の憲法大意(十回講義)始まる、二時間の講演了りて、越山禪師御代講として北野老師碧巖第一則を提唱せられ、大喝一聲會員爲めに震ふ、初め越山貫主親下碧巖録御提唱の豫定なりしが、俄かに越山へ御歸錫の御用事出來せられ、扱てこそ北野老師を御代講として御依囑あらせられたる次第なれ、

十九日、曇、憲法の講演了りて、北野師、碧巖録提唱後、一席の法話を試みられ、無



神無靈魂論に一駁を與へつれたり、午後壹時より公開學漸演説を執行す、木村委員登壇開會の辭を述べ、新佛教の主領境野黃祥氏歴史的佛教なる演題にて一時間許り、次に清新の主幹、高等中學林教師忽滑谷快天氏大乘非佛説なる演題にて一時間半許り、最後に新人の主幹、基督敎界進歩派の驍將、海老名彈正氏東西思潮の觸接なる演題にて滔々二時間に渉る熱誠なる大演説を試みられ、會員は勿論三百名の一般聽衆頗る感動す、五時頃解散

廿日、曇、夕雨、憲法、二時間、碧巖録壹時間、凡て例の如し、午后壹時より、水島委員の案内にて女子大學東京市猿育院等を參觀す、申込者四十名許りありたり、猿育院には參觀者より金三圓を寄附す、歸路大に雨り會員の困難一方ならざりき、

廿一日、晴、全科休講、

廿二日、曇、齋藤法學士病氣の爲め休講、本林教授大森知言師碧巖録を提唱す

廿三日、曇、憲法二時間にて講了、十時より閉會式を執行す、眞主代理として能山監院織田雪巖師出張せられ、祝聖を諷經し了りて、大森學監師會長代理として、講習員總代機道太心師に講習證を授與し、織田師は道德の衰頹を嘆じ信仰の不振を慨し、講習員は先驅となりて信仰德義の挽回者となるべきを訓誡せられ、來賓總代として荒木

磯天師は結制を講習會組織にすべきを述べ、會員總代として久我勘伸氏答辭を述べて茲に閉會式結了、直ちに茶話會に移る、祥雲委員の挨拶、高等學林教授厚美師の挨拶等ありて、茶菓すし等を會員に配す、餘興には琴竹の合奏、薩摩琵琶等ありて午後二時頃講習會萬歳を三呼して解散す、孤舟共に渡るすら猶ほ宿縁あり、短しと雖も二周の間席を同じうしたる人の今東西に分れんとす、亦情に於て忍びざるものありき、鴻盟社より寄贈せられたる「道のみなもと」、高田師より寄贈せられたる「通俗佛教一夕話」及び本會より「佛陀の慈光」等各一部宛を會員に配附せり、茶話會費の中へ學監寮より金拾圓下附せられたり、嗚呼不敏無經驗なる吾人の身を以てして、圖らずも此重任に當り、さしたる失躰を演ずることなくなして、首尾能く圓滿に其終を結ぶとを得たるは、偏へに佛天の加護と保護員諸氏の篤き擁護によりたるものなりと雖も、亦以て會員諸君の熱誠なる贊助の然らしめたる處ならずんばあるべからず、委員一同の深く感謝に堪へざる處なり、特に大學林學監大森師の、積疊せる事務のあるにも關らず、本會の爲めに非常の盡力を致されたるは、吾人謝するに辭なきを苦むものなり、吾人は利を得んが爲めに、此會を設けたるものにあらず、羊頭を懸けて狗肉を賣らんが爲めに、此會を設けたるものにあらず、去れば有體に言へば、吾人は會計の點に於

て頗る苦心したり、會費は費用の半額に當らざるなり、年々の繼續事業なる此會に於て、年々寄附を募集するも事情の許るさざるものあり、吾人は幾度か此點に於て苦悶したり、加旃、諸種の事情の纏綿する處、局外者の豫想も及ばざる困難迷惑の生ずるある等、備さに事業の困難なるを感じたり、吾人は幾度か此會の不成立に終ることなきやをあやぶみたり、而も幸に、結算の示す處收費相償ふに足るを知り、會員諸君の來書によりて、本會の計劃、亦多少効果を奏したるを知るを得たるは、吾人の喜悅何物か之れに如かん、唯だ仰いて佛祖無窮の冥助を謝するあるのみ、

夏期講習會結算報告

一金貳百四十九圓四拾四錢六厘	總收入
內際	會費及聽講料
一金壹百四十六圓四拾貳錢	寄附金
一金八拾貳圓四拾錢	前年度より繰越高
一金貳拾圓六拾貳錢六厘	總支出
計如高	
一金貳百貳拾九圓拾六錢貳厘	

- 內際
- 一金壹百〇四圓
- 一金九拾六圓拾六錢貳厘
- 一金四圓
- 一金貳拾五圓
- 一金七圓

計如高

差引金拾參圓貳拾八錢四厘

右相違無之候也

明治三十五年七月廿五日曹洞宗青年會

夏期講習會寄附金芳名錄

- 一金參拾圓
- 一金拾圓
- 一金四圓
- 一金參圓
- 一金參圓
- 一金壹圓五拾錢
- 一金壹圓五拾錢
- 一金壹圓五拾錢
- 一金壹圓五拾錢

講師謝禮  
開會式閉會式諸費及雜費  
施本五百部  
講義録編纂費並に校閲料共  
殘務費

殘金

- 兩木山御下附
- 大學林より下附
- 高等學林職員一同
- 秋野大學林教頭殿
- 村上 泰 音殿
- 大森 禪 戒殿
- 梶川 乾 堂殿
- 芝山 唇 外殿
- 大森 知 言殿

曹洞宗青年第二回夏季講習會記事

- 一金貳圓
- 一金壹圓
- 一金壹圓
- 一金參圓五拾錢
- 一金五圓
- 壹圓貳拾錢
- 一金壹圓
- 一金壹圓
- 一金壹圓七拾錢
- 一金壹圓
- 一金貳圓
- 一金五拾錢
- 一金六拾錢
- 一金五拾錢
- 一金壹圓
- 一金壹圓貳拾錢
- 一金壹圓貳拾錢
- 計金八拾貳圓四拾錢也

- 在田如山殿
- 荒木磯天殿
- 嶽尾來尙殿
- 圓靈殿
- 石館兵右衛門殿
- 山本探童殿
- 田邊鐵定殿
- 吉山大宗殿
- 石川洋之助殿
- 柳野宏道殿
- 常川太郎殿
- 機道太心殿
- 横山元隆殿
- 佐藤法禪殿
- 高野大祐殿
- 飯塚圓收殿
- 早瀬龜迎殿
- 東大寺鐵門殿

第貳回曹洞宗青年夏季講習會名簿

曹洞宗務局學務部長

曹洞宗大本山總持寺貫長

◎會長姓名

◎講師姓名

文學博士  
ドクトルチア  
フイソイ

法學士

文學士

- 直心淨國禪師
- 北野元峯師
- 大内青樹居士
- 村上專精氏
- 中山島泰藏氏
- 秋野孝道師
- 齋藤美知磨氏
- 大森知言師
- 深作安文氏
- 滑忽谷快天氏
- 境野黃洋氏
- 加藤咄堂居士
- 在田如常山師
- 海老名彈正氏
- 保護員姓名
- 秋野孝道師

曹洞宗青年第二回夏季講習會記事

鹿兒島縣鹿兒島郡四樓島西道  
 東京市赤坂區新町五丁目三十一  
 東京市神田  
 武藏國南多摩郡七生村宗印寺住  
 埼玉縣秩父郡吾野村全昌寺住

上山宇平次  
 松澤泰近  
 芦立環信  
 黒田電雲  
 清原重堂

◎委員姓名

◎會員姓名(申込順)

大森禪戒師  
 滑忽谷快天師  
 芝山唇外師  
 大森知言師  
 梶川乾堂師  
 祥雲晚成  
 木村泰賢  
 保坂哲隆  
 伊藤道海  
 淺田泰堂  
 光山百川  
 我孫子孝童  
 古橋祖孝  
 巖波國大川郡譽水村興田寺住  
 山形縣山形市香澄町  
 遠江國引佐郡三ヶ日村金剛寺  
 東京市赤坂區田町  
 桑田衛平  
 芦原忠住  
 田邊鐵定  
 后閑善三  
 磯田禪英  
 片柳大仁  
 成富源聰  
 佐粧圓智  
 松本宗麟  
 村上甚作  
 米谷滿定  
 藤原信道  
 末田勝登  
 橋本九三郎  
 宮坂勳童  
 小島貫道  
 土藏宥法  
 中村孫榮  
 鍋島忠備  
 福岡玄興  
 大塚賢隆

東京市麻布廣尾町  
 常陸國稻敷郡木原村永岩寺  
 東京市本郷森川町  
 相模國鎌倉郡藤澤大宮町長生院内  
 同  
 佐賀縣佐賀郡木庄村高傳寺内  
 陸中國東盤井郡山ノ目村  
 宮城縣志田郡高倉村  
 千葉縣市原郡平三村米原大通寺住  
 香川縣木田郡古高松村  
 岩手縣東盤井郡黃海村保壽寺住  
 東京市小石川區原町哲學館内  
 同  
 同  
 東京市麻布區材木町  
 東京市小石川區鉾差町  
 三重縣宇治郡山田町大字曾禰  
 石川鹿島郡大町村  
 東京市芝區三田四國町  
 大坂府南區難波元町月江院内  
 東京市赤坂區青山榎田原

久我勘申  
 横山元隆  
 富井教如  
 河野文敬  
 星徹定  
 中村桂堂  
 千葉德雄  
 千葉宗仙  
 機道太心  
 千葉廣宣  
 上野穆苗  
 齋藤諦賢  
 秦法顯  
 關根淨正  
 保田守太郎  
 小瀧顯八  
 小辻増吉  
 白藤定祐  
 藤井唯一郎  
 高島賢光  
 何禮之

實各 益宗 布	誌布 雜教 傳	大佛 字書 教	通佛 俗教	列傳 本佛 教史	淨土 宗	真宗 綱	日蓮 宗	天台 宗	維新 柱石 僧	正法 眼藏 私記 會本	正法 眼藏 涉典 續貂
教文 庫	道	藏法 數	各宗 綱	各宗 高僧 傳	綱	綱	綱	綱	照	會本	紹
全十二册	每月一回	全二册	全一册	全二册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全二册	全六册
郵定價金四十二圓六十錢	一六 分分 金金 二二 十二 四二	郵定價金三十四圓四錢	郵定價金十一圓四十五錢	郵定價金十一圓一錢	郵定價金十一圓二錢	郵定價金十一圓二錢	郵定價金十一圓二錢	郵定價金十一圓二錢	郵定價金十四圓五錢	郵定價金三十五圓六錢	郵定價金二十三圓四錢

正法眼藏 <small>和語</small> 合本	正法眼藏 <small>三時心聚</small> 卷	正法眼藏 <small>佛行向持上</small> 卷	正法出家功德卷	曹洞五位顯訣	上洞法服格正	文底祕沈鈔	一經神靈難義問答鈔	訂校註維摩經日講左券	標八大宗綱要	略釋迦譜	冠註華嚴原人論
全一冊	私記合冊	私記合冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全三冊	全一冊	全一冊	全一冊
刻近											
郵定價金三十四錢	郵定價金二十四錢	郵定價金二十四錢	郵定價金三十四錢	郵定價金三十四錢	郵定價金三十五錢	郵定價金三十五錢	郵定價金三十五錢	郵定價金三十五錢	郵定價金三十五錢	郵定價金三十五錢	郵定價金三十五錢

原人論	幽谷餘韻	心地觀經報恩品講義	信心銘夜塘水講義	佛遺教經講義	金剛經講義	三正金剛經講解	曹洞宗說教講錄	曹洞宗說教講錄	修證義聞解	撰擇集講義	洒落文庫	天いろはの義解
全一冊	全冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全四冊	全一冊	全一冊
刻近	刻近	再版中				品切	品切					
郵定價金二十八錢	郵定價金六圓	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢	郵定價金七十六錢







洞上在家禮誦式	佛延命地藏菩薩經	佛遺教經	三大師直指道訓 <small>信心銘</small> 合本	證道歌	四陀羅尼集	四同契合	放生	般若經	梵網經	金剛經
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價
金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
二八	二五	二五	二五	二五	二六	二六	二六	二五	二五	二二
錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢

八

標嚴咒	安樂經	遣教經	藥師如來本願功德經	妙法蓮華經要品	法華經	勤行法
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價
金	金	金	金	金	金	金
二六	三八	三八	四十五	四十八	四十六	三六
錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢

●施本之部●

木田吉草	芳川承大	內大報德	合川佛安心	內大佛安	內大佛安	三心法
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價	郵定稅價
金	金	金	金	金	金	金
二八	二八	三四	二三	二三	二三	二三
錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢

九





# ●●●禪學者必携の活用珍書●●●

問答二百則  
法問百則

## 禪學活問答

全一冊  
袖珍美本紙數三百頁  
定價金 二十五錢  
郵税金 四錢

近來禪學に關する書籍頻に出づと雖も多くは一場の空談にして、古徳の眞意を傳へ禪風の實相を解せしむるもの少し、本書は今人の座談に非ずして、古來の「問答」なるものを活用したるもの故、一讀の下、古人が生命を期して禪機を争ひたる實況を目撃する思ひあり、戒會等に於け、小參、上堂等の問答は戒師、導師との答話との相調和せざる理、法要中唯一の法問の如きも、追々理屈法問となりて禪機の活動は殆んど見ざるべからざるに至る、是れ實に此等の文字を教ふる書籍なきに因る、著者大に禪風の衰頹を慨し、問答兩者の便利を謀らんため珍製の書を涉獵して三百の問答を集め、且つ日常直に使用し、前句の商量まであれば、ハッセ世話も無く至極重寶なる珍書なり、乞ふ參禪の士師家と雲納とを問はず、本書を購求熟讀禪宗問答の復古を謀られんとす。

## 曹洞宗必要の施本發刊

勅額  
皇室と永平寺の關係

全登冊

再建  
勸募  
適用  
皇室と總持寺の關係

全登冊

正價金二錢 百部以上壹錢五厘 ○郵稅四冊迄二錢

正價郵稅共上と同じ (再建のすゝめ)

## ●●曹洞宗冥加金上納心得●●

一、今冥加金を本山に納むるの可否は、免に角、檀信徒をして本山の爲に納金する必要を知らせしめ併せて寺院の爲に納金する必要を知らしむるに動めんとす。  
一、曹洞宗務局のとは少しも云はず、兩本山のとのみならず、檀家に信仰の心を起さしむる機軸たること。

加藤咄堂居士著

## ●●婦女の修養●●

御婦人方が日常に讀みて其心を養ふべき教訓を簡單に言文一致を以て書き綴り、處女たること、細君たること、子たること、母たること、婦人として心得べき精神修養を問はず、面白く説きて、古今數百の節婦烈女之美談を採り、見地を茶湯、生花、和歌、俳諧、悉くこれ婦女の修養を授けしむるものとして趣味ある庭の讀本として此上なき好著なり、お伽噺の斬新なるものを收めれば婦人は勿論、男子も亦一本を讀すべきものなり。

全登冊 定價金 貳拾五錢 郵税金 四錢

加藤咄堂居士新著

## 道の源

定價金 二錢

- (一) 國の榮 (二) 人の心 (三) 民の道
- (四) 徳の母 (五) 道の源

郵稅●六冊毎に付貳錢十部以上壹部に付壹錢五厘づゝ、五十部以上壹部に付壹錢二厘づゝ、●百部以上壹部に付一錢づゝ、●三百部以上一部に付九厘づゝ、以下何部にても同様

日本國果して文明の國といふことが出来ませうか、日本國を文明にするには如何なる方法に依らねばなりませぬか、それは、**佛教**によるの外はありませぬ、本書は徳の根柢を明にし日本國**第廿世紀の今日**の民の守るべき道徳を示し、國民の守るべきことを説き各宗檀信諸君の讀まればなほ、**故に施本**に尤も適當

加藤唯堂居士著  
●修 養 活 全一冊 定價金貳拾五錢

藤井玄復著  
●女 子 の 教 全一冊 定價金貳十錢

大内青體居士著

●普 勸 坐 禪 義 講 全一冊 定價金十貳錢

●禪 戒 訓 義 講 全一冊 定價金十貳錢

●六 方 禮 經 講 話 全一冊 定價金十貳錢

家庭 文庫  
●聖 德 太 子 第一冊 定價金十二錢 郵稅金二錢

家庭 文庫  
●大 石 良 雄 第二冊 定價金十二錢 郵稅金二錢

第三篇以下近刻

布敷家唯 一の大王  
●護 法 七月一日起發行 每月一圓 郵稅金四錢 全年五圓 半年三圓 半年前金八十錢

慶應義塾大學 文學士 忽滑谷快天先生校

宮永 仲基 出定後語 合 定價金二十錢

服部 天游 赤 騾 々 本 郵稅二錢

一名日本最古の大乗非佛説論

大内居士著 (三版) 出來

禪 學 三 要 全一冊 定價金三十錢 郵稅金四錢

加藤唯堂著 (再版) 出來

婦 女 修 養 全一冊 定價金廿五錢 郵稅金四錢

全 著 (再版) 出來

修 養 清 話 全一冊 定價金廿五錢 郵稅金四錢

大本山永平寺御藏版

永平寺眞景 正價拾五錢 郵稅貳錢

本願寺に本願寺圖繪あり佛光寺に佛光寺圖繪あり然るに其實力に於て優に眞宗に匹敵する一大宗派なる曹洞宗に未だかゝるものあるを聞かず是れ實に檀信徒は無論荷も眼を佛敎界に注ぐもの、遺憾とする所に於て特に今回御恩賜になれる陛下御直筆の承陽の勅額の如き全國道俗檀信の擧げて隨喜仰仰して拜覽せんと欲する所のものなり茲に於て大本山に於ては右の勅額を撮影して優美鮮明なる寫眞版となし加ふるに宏壯雄大なる法堂佛殿僧堂勅使門等山内の諸堂宇廿有餘及び有名な欄間の彫刻永平寺全景等と同じく寫眞版とし題して永平寺眞景と稱して江湖に頒たるされば一たび此を鑑かんかすてに拜登せられたる諸氏は依てます、崇仰の念を促すべく未だ拜登の因縁熟せざるの人は坐ながらその眞景に接し崇仰の感を起こるべし而して本圖は管にその眞景を寫したるのみならず諸堂建築の由來位置間敷彫刻の概要に至るまで一々丁寧に説明を與へたるものなれば一部の大本山永平寺史と云ふも過言にあらず乞ふ道俗檀信の諸士一本を購求して一萬四千の未寺と六百萬の檀信を有する我が大本山の眞相を世に紹介せられよ

淨土宗管長山下現有大僧正題字  
忍敏上人序 ● 洛陽隆長著

# 一枚起請文但信鈔

冊一全

淨土宗の聖典たる一枚起請文に就いては、古來種々の文ありしも、未だ完全のもの少く、特に同宗間に於ても異議の伴ふものありて、學者布教家の困難なるもの多かりき。本管は天台宗の學匠にして學識深奥なる隆上人が自ら起請文を玩味して其旨を諒し、淨土宗の門に入り一枚起請文の教に満足せず、進んで淨土宗の門に入り、みたるものにて、實に完全にして且つ面白く有益なる書なり。彼の大藏經校合に就いて有名なる忍敏上人の宗門の布教師に、此上の非凡なるものを稱揚したるもの故山下管長現下の發成を経て出版發賣したれば、諸君の高評愛讀を祈る。

淨土宗教校講師道重信教老師講述(圓光大師御像入)  
言文一致  
名假致  
洋裝全一冊金三  
錢●郵稅四冊三  
以上二錢五厘●

百册以上二錢●五册以上一錢七厘●  
第一淨土宗教の必要なる所以●第二圓光大師御傳●第三圓光大師御歌●第四圓光大師御和讃●第五淨土宗の教旨●第六彌阿の本願●第七安心起行往生●第八圓光大師一枚起請文●第九淨土宗の本山と末寺●第十淨土宗の文書布教に適當なる書籍なきは同宗各位の常に

# 淨土宗信徒心得

明治三十六年四月廿四日印刷  
明治三十六年四月廿七日發行

編輯者 曹洞宗青年會

代表者 保阪哲隆

發行者 今村金次郎

印刷者 太田音次郎

印刷所 株式會社 秀英舍

# 發行所

東京市芝區露月町十八番地  
(電話三千二十七番)

鴻盟社



十八  
痛嘆せらる所なり、本書は淨土宗碩學道重信教老師が此  
缺點を補はる爲め、特に講述せられたるものにて、平易  
通俗なるべく専門語を避けて而かも洩れなく本宗必  
要の件を述べられたるものなれば、學者と無學者とを問  
す一般世人に淨土宗の信ずべきことを知らしむるには極  
めて適當なり殊に無二の廉價は本書の特色なり

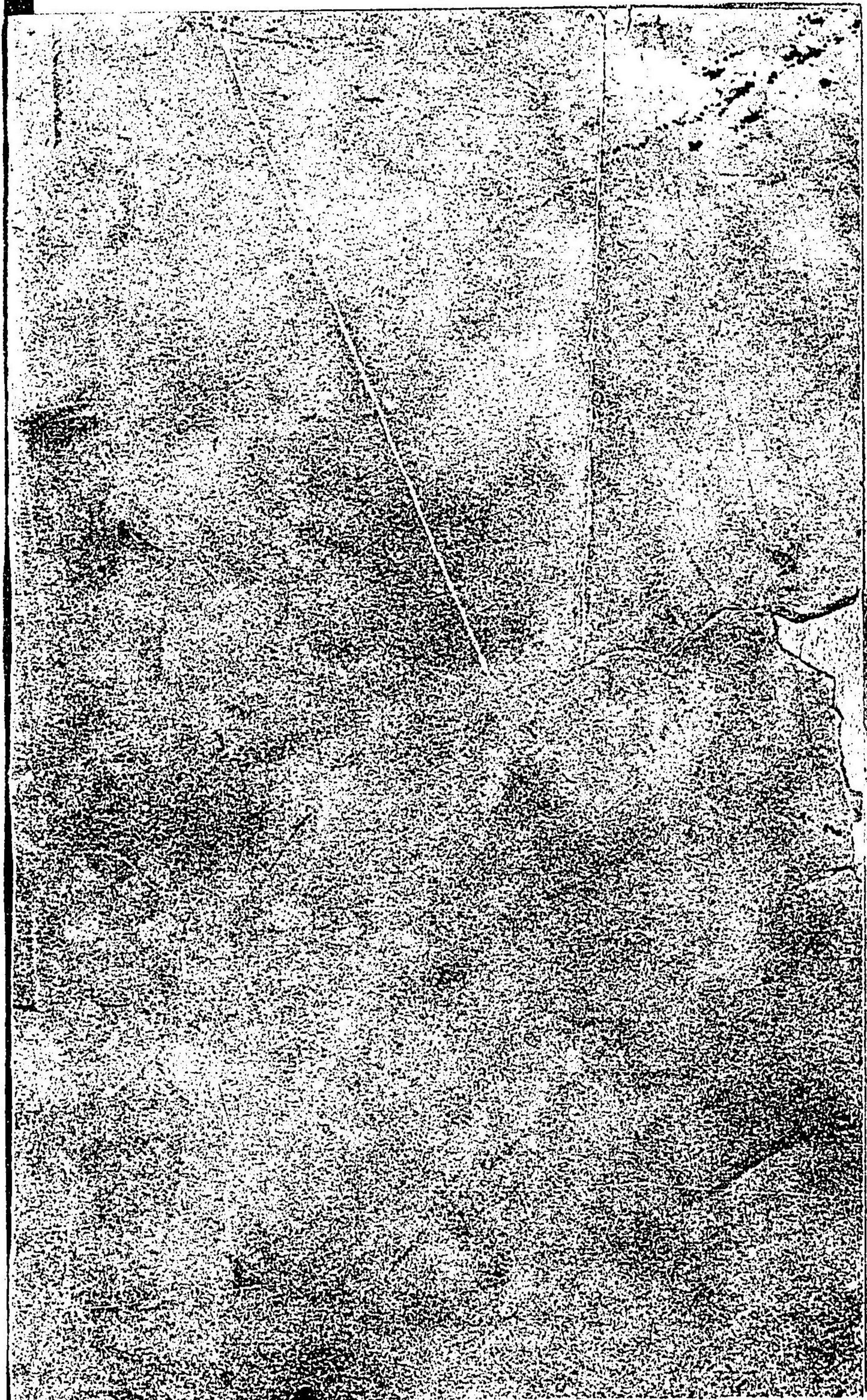
## 來馬琢道師著(訂正再版)

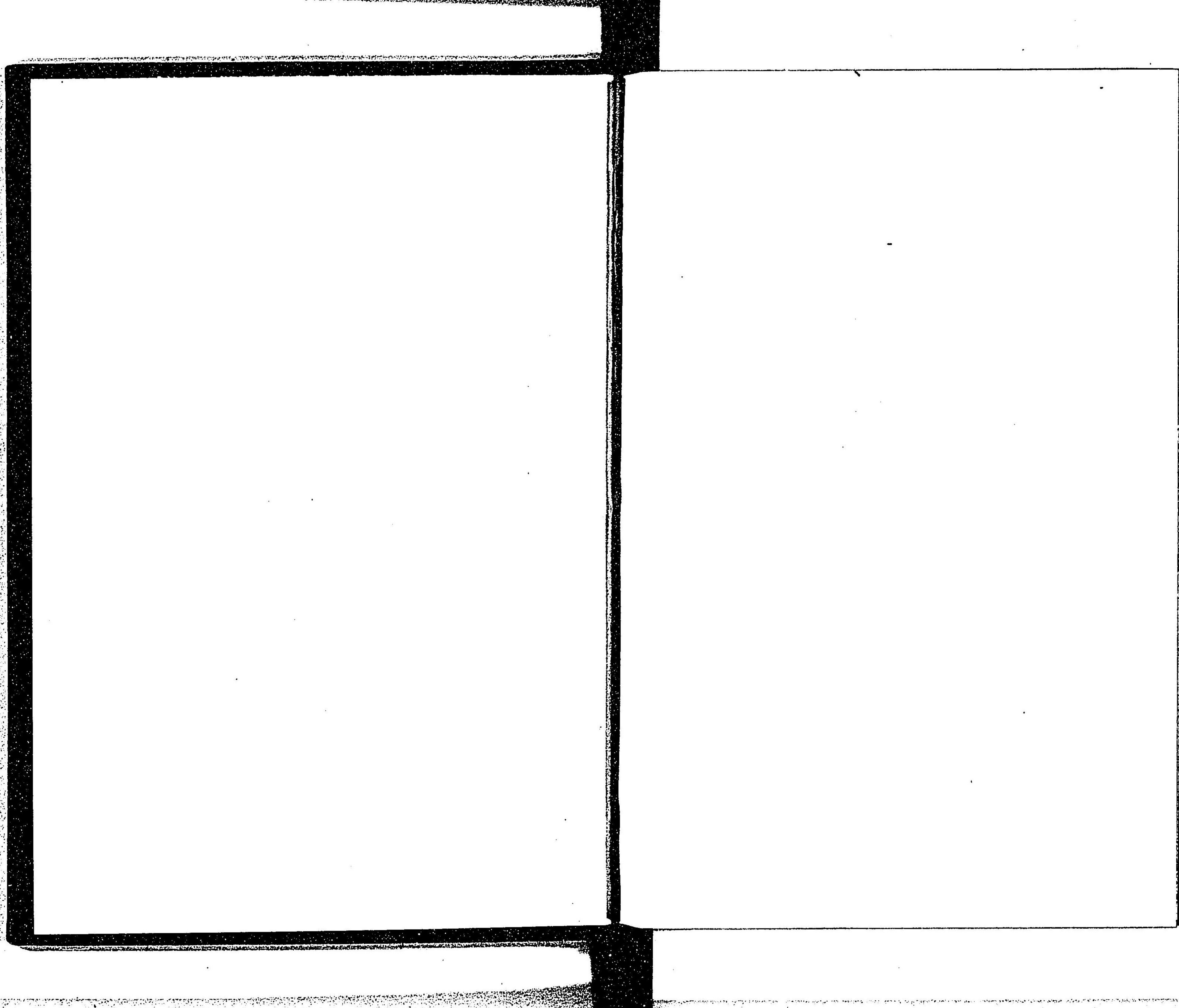
一年末  
一年始  
適用  
一口曹洞宗檀信徒心得

正價一冊金壹錢○百部以上八厘

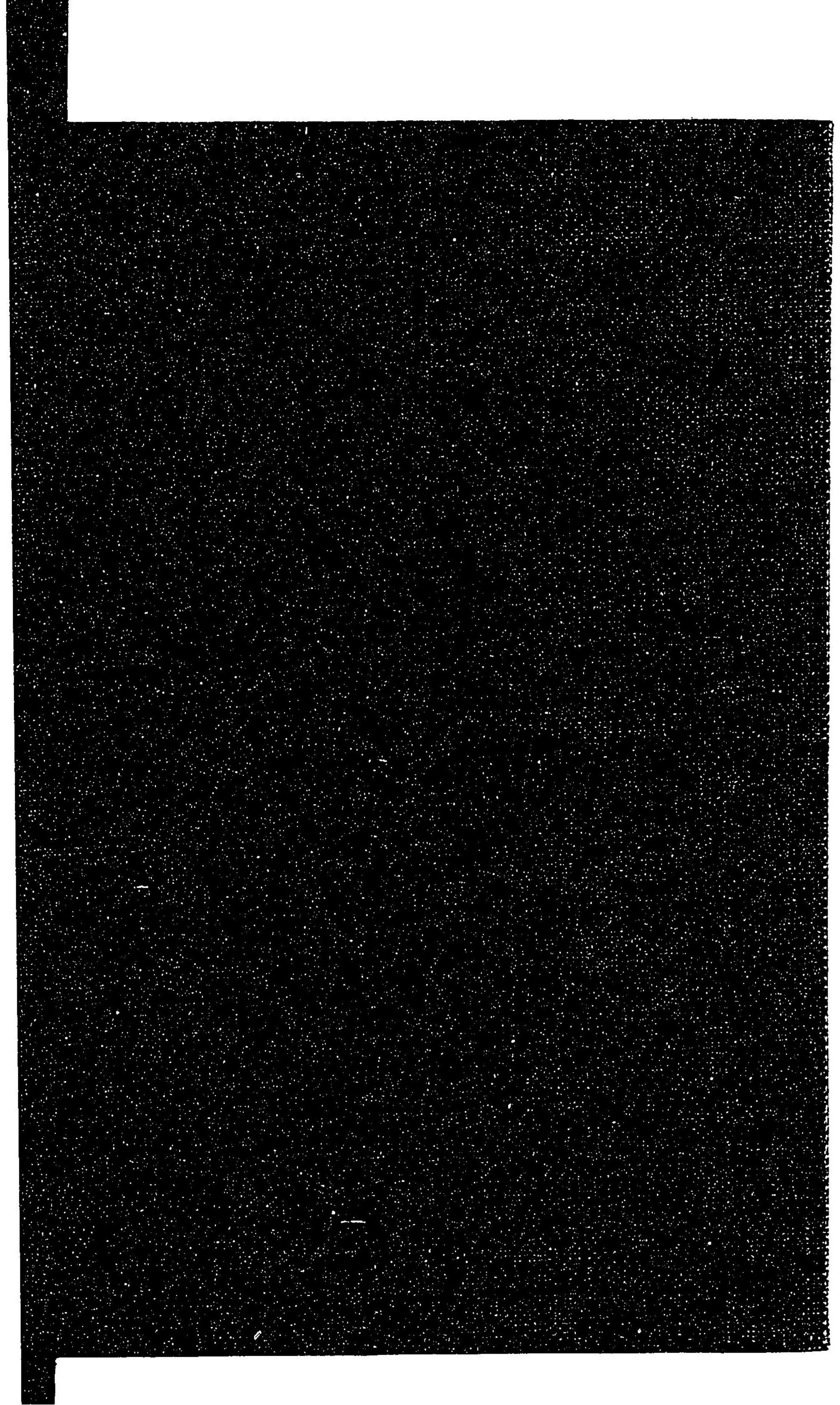
○郵稅金貳錢(五部まで)

之は著者が檀家數百名の者へ住職として返  
答をした問答を書いたもので、極々平易に  
やさしい質問を誰にでも分るやう書いてあ  
ります、殊に無二の廉價ですから、一寸と  
した土産や施本には尤も適當です、見本を  
要する人は郵券三錢送られよ、一讀すれば  
實功が知れます









019812-000-8

318-85

仏教講演集

曹洞宗青年会編

M36.4

ABG-0634

